大谷大学真宗総合研究所

研究所報

No.69　　2017. 3. 1.

目次

仏教研究を基軸とした学術研究ネットワークの創生をめざして 1
2015(平成27)年度「指定研究」等研究経過報告 2
2016(平成28)年度「指定研究」研究組織一覧(追加) 7
2015(平成27)年度「一般研究」研究成果概要 8
海外学会参加・研究調査報告 21
海外研究調査報告 24
国内研究調査報告 27
公開講演会・公開研究会 28
学術交流協定に基づく共同研究 31
彙報 32

仏教研究を基軸とした学術研究ネットワークの創生をめざして

研究・国際交流担当副学長　真宗総合研究所長・教授　松川　節

大谷大学は、1901年に近代的大学として開学されて以来、仏教教育・仏教研究を掲げてきた。中でも国際的に広がりを見せる仏教研究を重視し、1981年に開所した真宗総合研究所（以下、真総研）に「海外仏教研究班」（現在の国際仏教研究班）を設置し、諸外国における仏教研究の動向を調査・研究するとともに、国際的な規模で開催される学会に積極的に参加してきた。

本学が制定したグランドデザインでは、国際的な研究ブランディングとして、「学術活動の国際的なネットワークの構築、研究成果の海外発信など、学術活動の国際化を推進し、「仏教研究」の分野において、国際的な存在感を高め」ることを宣言した。具体的には、「大学が主体となる組織的な研究においては、仏教研究に学術資源を集中（優先）させ」、「海外の研究者たちとのネットワークを構築し、学術資源を提供することにより研究交流のハブと言うべき機能」を推進することに取り組むとした。

この研究ブランディングを具現化し、本学が推進する仏教研究を深化させつつ、さらに広範かつ一般性を有する学術研究そのものの発展をめざすためには、何が必要だろうか。

第一に、学術研究資源の充実化が挙げられる。本学に所属する122名の専任教員のうち約半数が、何らかの形で仏教研究に関わっている。また、真総研では、６つの指定研究班、３つの資料室、一般研究班（共同研究７件、個人研究13件）が研究スペースを得て研究活動を行っている。図書館は84万冊の蔵書を擁し、そのうち約16万冊が仏教関連図書である。博物館も数多くの仏教文物を所蔵する。研究環境としては、すでに十分充実していると言えよう。

しかしながら、研究成果の発信は、まだまだ十分でない。本学が所蔵する真宗仏教関連の典籍をはじめとする稀覯文献は、積極的にデジタル化し、斯界の共有財産としてゆくべきであるし、真宗大谷派から委託されている東本願寺開教資料をどのように扱っていくかという課題もある。

その一方、2016年度には２つの新たな取り組みが動き始めている。一つは真総研東京分室の開室である（詳しくは『所報』68号の池上分室長による巻頭言をご参照いただきたい）。もう一つは、本山の一機関である東方仏教徒協会（Eastern Buddhist Society）の大谷大学への事業移管である。2017年度には、真総研に附設され、国際仏教研究班が運営を担当する計画で、伝統ある英文学術誌*Eastern Buddhist*の編集と刊行を担うことになる。

第二に、国際的なネットワークの構築という課題がある。本学は、すでにハンガリーのエトヴェシ・ロラーンド大学、ドイツのマールブルク大学、フランス高等研究院、韓国東國大学校、中国社会科学院歴史研究所、ベトナム社会科学アカデミー、モンゴル国立大学とそれぞれ学術協定を締結し、研究交流を行っているが、いずれも一対一の交流に止まり、本学がハブとしての機能を果たすには至っていない。しかしこの点でも今年度は新たな動きがあり、米国カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所と真総研が学術交流協定を締結したことをうけて、この２機関にさらに龍谷大学世界仏教文化研究センターが加わり、３機関共同で『歎異抄』の英訳を行う国際ワークショップを2017年から五年間に計10回開催することになった。これを端緒にして、国際的な仏教研究の潮流を本学がリードしていく可能性が、徐々に拓かれつつある。

第三に、こうした新たなブランディングの創生を支える研究者の矜持として、公正な研究活動への対応と、研究における適切なエフォート管理が求められていることを強調したい。本学では、学長をトップに全学を挙げて「研究活動の自己点検・評価」に取り組む体制を整えた。さらに、今までの研究倫理関係の規程類を再構築し、公正な研究活動を実施するために何が求められているかを研究者が明確に認識できるようになることをめざしている。今後、研究への適切なエフォート配分が実現するよう、PDCAサイクルの構築が課題となるであろう。

2015（平成27）年度「指定研究」等研究経過報告

教如上人研究［特定研究］

真宗大谷派･東本願寺開祖である教如上人に関わる史料の調査と研究

研究代表者・教授　草野 顕之
（日本仏教史・真宗史）

本研究では、「真宗大谷派・東本願寺開祖である教如上人に関わる史料の調査と研究」を課題として調査･研究を進めている。

真宗大谷派・東本願寺開祖ともいうべき位置にある教如上人（永禄元年＝1558～慶長19年＝1614）の研究は、「大谷派なる精神」、大谷派存立の理念と存在理由を明らかにする意義を有している。

こうした意義を持つ本研究では、教如上人に関する史料の全面的・組織的な調査を実施し、それらを体系的に整理して、将来的には出版・公刊し、広く内外に成果を問うことを目的・目標としている。

具体的には、1．教如上人授与物、2．消息類、3．聖教文言掛幅、4．開板聖教（正信偈三帖和讃・御文など）、5．言行を伝える覚書・日記類などの諸史料を調査・研究の対象とし、これまでに公刊されている史料集や図録類などからの収集を進めるとともに、寺院調査も行い、そこで得られた情報をデータベースとしてまとめ、画像データ、史料翻刻データなども蓄積している。2015年度の研究活動とその成果については以下のとおりである。

〈研究会〉

2015年度は４回の研究会を開催した。2015年５月27日㈬には、川端泰幸研究員より「教如と織豊武士団」と題する研究報告がなされ、続いて調査日程などの打合せを行った。また、11月20日㈮には、夏期に実施した光現寺（長浜市）・徳満寺（長浜市）および、春日五日講（岐阜県揖斐川町）の調査成果についての検討を行い、いずれの寺院・講も、教如上人との深い関係を持ち、東本願寺創設の基盤となっていたことを確認した。2016年１月13日㈬は、春日五日講の研究成果をまとめるための検討会を実施するとともに､本誓寺（新潟県上越市）の予備調査の状況と、本調査に向けての打合せを行った。３月15日㈫の研究会では、本誓寺調査に向けて、具体的な手順や日程の打合せを行った。これら一連の活動を通じて、教如上人と各地寺院・門徒との関係について、次々と新たな知見を得ることができている。

〈調査〉

2015年度は､①光現寺（長浜市）･②徳満寺（長浜市）･③春日五日講（岐阜県揖斐川町）･④岡崎別院（京都市）･⑤本誓寺（新潟県上越市・予備調査）と、合計５回の史料調査を実施した。これらの調査を通して、教如上人と地域との結びつきが見えつつある。

清沢満之研究

清沢満之の生涯と思想の研究を更に進め､その成果を『清沢満之全集』の補遺として、発刊する

研究代表者・准教授　藤原 正寿
（真宗学）

本研究は清沢満之の生涯と思想の研究を進めることを目的としている。大谷大学編『清沢満之全集』（岩波書店、『全集』と略）の刊行以来、清沢研究や近代仏教史研究等の諸分野において『全集』は広く多くの研究者に読まれ、研究の進展に大きな役割を果たしている。2014年度に活動を再開した本研究では既刊『全集』に未収録の文献を収集し、補遺として刊行することを主な活動内容としている。それは清沢を学祖と仰ぐ本学が継続的に行うべき使命であると言えよう。

本年度は、以下の三点を柱に研究を進めた。

①前研究班収集文献の精査・翻刻
②『全集』未収録文献の収集、翻刻
③補遺編集方針の検討に向けた研究会の開催

①について前研究班（1991年度から2003年度まで活動、以降2007年度まで大学史研究内で活動継続）が収集した西方寺蔵清沢自筆稿の中で『全集』未掲載文献の精査を行った。これらは大学時代の受講ノート、書籍からの抜書等が中心であり、『全集』掲載基準を満たさないため掲載されなかった文献である。その中で十一点が未翻刻であり翻刻作業を再開した。これらの文献が有する意義は「清沢満之の思想形成を探る資料」「日本近代教育史（帝国大学の講義内容）の資料」の二点が挙げられる。掲載基準を満たさないため補遺収録は難しいが何らかの形で公開すべき重要な文献群で

ある。

②について出張調査を二度実施した。2015年９月２日㈬、西方寺に赴き活動報告と補遺出版に向けた具体的な相談を行った。また、同寺所蔵の清沢自筆書簡と清沢宛書簡等、新たな資料を確認し予備調査を行った。2016年３月24日㈭～25日㈮、長徳寺に赴き同寺所蔵の清沢講義録（「哲学史」「近代史」「今世哲学史」「倫理学史」「近世倫理学史」）と清沢自筆書簡等の公開方法を協議した。2015年３月末現在、補遺掲載基準を満たす文献二十点の現存を確認し、十四点を翻刻済みである。

③について2016年２月３日㈬、杉本耕一愛媛大学准教授（当時）を招聘し、「清沢満之と宗教哲学」を講題に公開研究会を開催した。

以上の成果を踏まえ、補遺の構成、編集上の諸問題を具体的に検討していくことが今後の課題である。

国際仏教研究

諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開

研究代表者・教授　井上 尚実
（真宗学）

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。本年度も英米班、ドイツ・フランス班、東アジア班の三班に分かれて研究活動を進めてきた。各班の研究成果の概要は以下の通りである。

〈英米班〉

Ⅰ．翻訳研究活動

阿満道尋嘱託研究員を中心に、真宗大谷派北米開教区真宗センター（Shinshu Center of America）から出版予定の大谷派教師課程教科書『浄土の真宗』『宗門の歩み』の英訳について、前年度に引き続き翻訳チェックと編集校正作業に協力した。今年度は『宗門の歩み』の訳語と文献解題の検討を終えた。

※『浄土の真宗』英訳は *An Introduction to Shinran's Pure Land Buddhism* として2016年７月に出版された。

Ⅱ．国際学会・シンポジウム関係

(1) 国際学会への参加

①第17回 国際真宗学会（IASBS）学術大会

2015年８月７日㈮～９日㈰カリフォルニア州バークレーの仏教大学院（IBS）において「浄土教における主体性」をテーマに開催されたIASBS学術大会において、「現代大谷派教学における宗教的主体性の解明」（The Clarification of the Issue of Religious Subjectivity in Modern Ōtani-ha Doctrinal Studies）という題目でパネル発表を行った。発表者は加来雄之（真宗学科教授）、西本祐攝（短期大学部仏教科講師）、マイケル・コンウェイ（研究員）、井上尚実（研究員）の４名（詳細については『所報』67号所収の報告を参照）。

②第21回国際宗教学宗教史会議（IAHR）世界大会

2015年８月23日㈰～29日㈯、ドイツのエアフルト大学で開催されたIAHR世界大会において、ドイツ・フランス班と共同でパネル発表を行った（下記ドイツ・フランス班の報告を参照）。

(2) シンポジウムの開催

2015年６月26日㈮・27日㈯の２日間、大谷大学メディアホールにおいて真宗近代教学アンソロジー、*Cultivating Spirituality: A Modern Shin Buddhist Anthology* 出版記念シンポジウムを開催した（詳細は『所報』67号所収のコンウェイ研究員による報告を参照）。なお、このシンポジウムの成果は *Cultivating Spirituality* のcompanion volumeとして英文学術書として出版する予定である。

(3) シンポジウム開催の準備

2016年５月26日㈭・27日㈮の２日間、大谷大学メディアホールにおいて開催の国際仏教シンポジウム（ELTE東アジア研究所との共催で第２回）の準備を進めた。なお、第１回シンポジウムの成果については2015年12月に校了し、*Faith in Buddhism*（Imre Hamar, Takami Inoue, eds., Budapest Monographs in East Asian Studies 6）として2016年３月に刊行した。

Ⅲ．公開講演会の開催

以下の３回の公開講演会を開催した（会場はいずれも響流館３階マルチメディア演習室）。

(1) 2015年４月14日㈫　16:20 ～ 17:50

講師：井内真帆氏（神戸市外国語大学客員研究員）

講題：「スーパーグローバル！？　日本人研究者のチベット研究」"Tibetan Studies in a Global Context: What is the Advantage of Japanese Scholars in Tibetan Studies?"

(2) 2015年７月14日㈫　16:20 ～ 17:50

講師：ジョン・ロブレグリオ氏 John LoBreglio（オッ

クスフォード・ブルックス大学）

講題：“Japanese Buddhist Perspectives on the Peace Conference and Early Twentieth-Century Imperialism”
「パリ講和会議と20世紀初頭の帝国主義に対する日本の仏教者の視点」

(3) 2015年10月２日㈮　16:20 ～ 17:50

講師：ムダガムウェ・マイトリムルティ氏 Mudagamuwe Maithrimurthi（ハイデルベルク大学）

講題：Significance and Relevance of Benevolence (*maitī*) and Compassion (*karuṇā*) in Buddhist Thought「仏教思想における慈（マイトリー）と悲（カルナー）の概念の重要性と関連性」

Ⅳ．その他

国際研が収集してきた未整理の図書の整理・公開については、研究所所蔵の欧文仏教雑誌とデータ・ベースを照合し、欠本や図書館で継続購入している雑誌との重複などについて整理する作業を進めた。

〈ドイツ・フランス班〉

Ⅰ．学会参加・発表

2015年８月23日㈰から29日㈯にかけて、“Dynamics of Religion: Past and Present” をテーマにドイツ・エアフルト大学で行われた第21回国際宗教学宗教史会議世界大会（IAHR）に参加しパネル発表を行なった。パネルのタイトルは「現代の日本仏教における社会適応の試み：浄土教の伝統における組織的・言論的な変容　」（Attempts at Adaptation in Contemporary Japanese Buddhism: Organizational and Discursive Transformation in the Pure Land Tradition）。マイケル・コンウェイ（研究員）が主任・司会をつとめ、ロバート･ローズ（研究員）、木越康（真宗学科教授）、藤枝真（研究員）、新田智通（仏教学科講師）の４名が発表し、マイケル・パイ（嘱託研究員）が応答する形で行なわれた（詳細は『所報』67号所収のロバート・ローズ研究員による報告を参照）。

Ⅱ．翻訳研究

マールブルク大学のD・コルシュ教授による『マルティン・ルター入門』の和訳をルターによる宗教改革から500年にあたる2017年度に出版できるよう訳文の仕上げを進めた。

〈東アジア班〉

Ⅰ．中国社会科学院歴史研究所との共同研究

2010年度に始まった中国社会科学院歴史研究所との共同研究を継続。５年間を期間として学術交流協定を更新し、共同研究を推進した。

Ⅱ．国際シンポジウムおよび研究会の開催

国際シンポジウムを２回、公開研究会を１回開催し、研究を推進した。詳細は下記の通り。

(1) 大谷大学博物館所蔵『華夷譯語』出版記念国際シンポジウム

2015年５月22日㈮に大谷大学博物館所蔵『『華夷譯語（西番譯語四種猓玀譯語一種）』影印と研究』の出版を記念する国際シンポジウムを開催した。

①更科慎一「日本における華夷譯語研究の現状」
②孫伯君「傅斯年図書館蔵『松潘属包子寺等各西番譯語』初探」
③池田巧「大谷大学所蔵本呂蘇（リュズ）譯語について」
④三宅伸一郎「大谷大学所蔵『西番譯語』におけるチベット文字表記の特徴」

(2) 中国社会科学院歴史研究所との共同研究

2015年７月６日㈪～ 10日㈮に中国社会科学院歴史研究所より王震中副所長、徐義華研究員、張国旺副研究員の３名を招聘し、本学にて研究活動を行うとともに、７月８日㈬には下記の公開研究会を開催した。

①王震中「中国王権的誕生――兼論夏商周三代複合制国家結構」
②徐義華「中国最早的分家記録――西周琱生三器試析」
③張国旺「近年来中国大陸元代佛教研究総論」

(3) 中国古代史及び敦煌・トルファン文書研究国際シンポジウム

2015年12月19日㈯に大谷大学真宗総合研究所と中国社会科学院歴史研究所の共催にて本学の教員２名に加え、海外から４名、国内から４名の研究者を招聘し、国際シンポジウムを開催した。あわせて、大谷大学博物館に所蔵される敦煌文書の閲覧を行った。

①王震中（代読：雷聞）「中国国家形態結構的演進与民族類型的関係」
②江村治樹「中国新石器時代の都市発達をめぐる諸問題」

③牛来穎「大谷馬政文書与《厩牧令》研究―以進馬文書為切入点」
④浅見直一郎「随葬衣物疏をめぐって」
⑤李錦綉（代読：牛来穎）「“移隷葱嶺”与唐代的西域経営」
⑥松浦典弘「杏雨書屋所蔵の敦煌仏教関係文献―羽699を中心に―」
⑦雷聞「隋唐的郷官与老人―従大谷文書4026《郷官名簿》説起」
⑧中田裕子「５、６世紀におけるアルタイ地方の交易拠点―回鶻路をめぐって」
⑨礪波護「敦煌と京都の五台山」
⑩黄正建「大谷占卜文書研究（之一）―兼与敦煌占卜文書比較―」
⑪楊宝玉「羽032-1《駅程記》与大中五年張議譚入奏諸問題弁析」
⑫赤尾栄慶「大谷大学所蔵敦煌写経私見―書誌学的観点から―」

当初、中国社会科学院歴史研究所より参加を予定していた王震中副所長と李錦綉研究員が欠席となったため、それぞれの報告については代読がなされた。

西蔵文献研究

チベット語文献及びパーリ語貝葉写本のデータベース化

研究代表者・准教授　三宅 伸一郎
（チベット学）

１．チベット語文献の電子テキスト化

以下の２点の文献の電子テキストを作成した。

①ニマ・タンパ＝シェーラプ・ジンパ『中観学説決択集』（蔵外No. 13949 ～ 13954）
②イェシェー・トゥプテン・ギャムツォ『クンブム寺歴代座主記および仏像・仏塔等の目録』（蔵外No.11861）

とりわけ①に関しては、チベット仏教ゲルク派の最高学位「ゲシェー・ラランパ」の称号を得ているトゥプテン・ガワ（松下賀和）氏によって、難解な縮略文字や書写時の誤りをすべて正しい綴りにしたテキストが完成された。

２．モンゴル国立大学との共同研究

U. エルデネバト先生を本学に招聘し、国内の研究者もお招きして公開講演会を開催した。また、モンゴル国立大学にて共同研究会を開催し研究報告を行った。詳細は『所報』No.68（p.16）参照。

３．パーリ語貝葉写本のデジタル化

タイ中部地域の王室寺院（ワット・マハータートユワラートランサリットやワット・ラーチャシッタラーム等）所蔵未整理写本リストを整理し、同リスト所載の文献名と本学所蔵写本との比較を通じ、稀覯本の抽出作業を進めた。また、大谷貝葉の資料的価値を再確認するために、内外の研究者を招き公開ワークショップ「大谷大学所蔵タイ王室寄贈パーリ語貝葉写本の世界」を開催した。詳細は『所報』No.68（p.27）参照。

４．寺本婉雅関連借用資料の整理

村岡家および宗林寺より借用中の寺本婉雅関係資料について、集中的に資料全体の調査・点検・撮影をおこなった。一連の調査における最大の成果は、宗林寺資料中に、稀覯本『モンゴル仏教史』を発見したことであった。資料は､その全体に対する目録を完成させ、専用の箱に収納し、所蔵者に返却した。また、寺本家に所蔵される資料に対する調査もおこなった。詳細は『所報』No.68（p.23）参照。

５．フランス国内所蔵のチベット語文献およびフランス人学者による成果物等の調査

予備調査としてインターネット等を用いて情報収集をおこなった。

ベトナム仏教研究

ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との共同研究

研究代表者・教授　織田 顕祐
（仏教学）

本研究は、ベトナム社会主義共和国のベトナム社会科学アカデミー宗教研究院（以下、「宗教研究院」）との間で締結された協定に基づき推進する共同研究である。

昨年度より進めてきた『日本仏教概説』については、執筆状況の確認と意見交換を継続的に行い、日本語原稿の大半が揃うにまでなった。現在も継続して執筆者

との連絡を取り続けている。

また、2016年３月21日㈪～ 26日㈯の期間にわたって、織田顕祐（研究代表者）と箕浦暁雄（研究員）が、調査のためベトナムを訪れた。現地では、大西和彦（嘱託研究員）の同行を得て、トゥアン院長をはじめとする宗教研究院の人びとと打合せを行い、「概説」の進捗状況の報告・確認とともに今後の研究の進め方について意見交換を行った。その後、現地の仏教寺院をいくつか調査するとともに、ベトナムの仏教状況を表す書籍を現地書店において購入することができた。ついで、ベトナム国家大学ハノイ校人文社会大学を訪れ、ファン・ティ・トゥ・ザン博士と懇談し、人文学研究で今後協力し合っていくことを確認した。この訪越に関しては、既に『研究所報』第68号pp.17 ～ 18にも報告しているので、併せて参照されたい。

更に、2015年度は研究成果の公開発信も進めることができた。

10月28日㈬には、グェン・ヒュー・スー氏を招聘して、「ベトナム仏典刊行略史―永厳寺所蔵木版を中心として―」と題して講演会をマルチメディア演習室において開催した。

11月５日㈭～６日㈮にかけて、日本教育会館において開催された東方学会平成27年度秋季学術大会で、桃木至朗（嘱託研究員）が「金石文から見た中世ベトナムの国家・社会」と題して講演を行った。また、浅見直一郎（研究員）が同学会に参加した。

インプット・アウトプットともに、大きく進めることができた１年であった。

大谷大学史資料室

大学史関係資料の収集・整理

室長・准教授　松浦 典弘
（東洋史学）

大谷大学史資料室の主な業務は、年史編纂を目的とした大学に関する史資料の収集、整理・保存、公開である。

収集の面では、図書館に保存されない大学発行の刊行物を将来に伝えていくシステムを構築するために、大学発行の刊行物及びパンフレット等の調査を学内の全部署に対して行った。その結果を受けて、散逸する恐れのあるノベルティ等を継続的に保存していくための提言をした。

整理・保存の面では、昨年度から引き続き、武田武麿先生（元大谷大学教授）から寄贈された資料の整理と目録のチェック作業を行っており、21箱中12箱まで終了した。また、当資料室所蔵のフィルム資料については、経年劣化から防ぐために、未整理フィルムのデジタルデータ化を進めるとともに、デジタルデータ化が終了した旧「学事史研究班」の撮影フィルムや『近代100年のあゆみ』のフィルム等の目録作成を行っている。

公開の面では、図書館１階エントランスを借りて、２回にわたって当資料室が所蔵している資料の展示を行った。1901年（明治34）に東京巣鴨の地に開学してから京都の現所在地に移るまでの10年間を扱った「大谷大学～東京編～」展と、旧至誠館から響流館へと移動した図書館にスポットを当てた「大谷大学の歴史をたどる～図書館トリビア～」である。

また、大学史関係資料の保存・公開のノウハウを得るために、全国大学史資料協議会の全５回の研究会に参加し、また他大学の博物館へ見学に行った。

この他に、戦前の本学卒業生である金九経の業績についての研究会を主催した。詳細については、研究所報No.68に記事を掲載しているので、参照されたい。

東本願寺海外布教資料室

大谷大学図書館所蔵「東本願寺旧蔵資料」海外布教関係部分の整理

室長・教授　桂華 淳祥
（東洋史学）

大谷大学図書館所蔵「東本願寺旧蔵資料」に含まれる海外布教関係部分は、おもに20世紀前半における東本願寺の海外布教に関する公文書の綴りで、当時の海外布教の実態を伝える貴重な資料である。しかしそれは事務書類綴りとして未整理の状態で残されているもので、その内容はもとより点数すら正確には把握されていない。したがってこの状態が続けばその存在も知られず、あるいは散逸の恐れもある。

本資料室の目的は、これら未整理の資料を整理して「資料一覧」を作成するとともに、資料自体を適正な形態にまとめて保存することにある。これによって本資料の半永久的な保存が可能になるとともに、今後、当該時代の東本願寺の活動をはじめとする様々な研究に寄与することが期待される。ここに本資料を整理す

る意義がある。

資料は段ボール箱に入れて借り番号を付してある。合計171箱。2015年度の作業で未整理のまま残るものは50余箱となり、2016年度には一応の完了を目指せるところまで来ている。具体的な方法は下記の通りであるが、史料の性質上、(a) 真宗総合研究所と (b) 図書館・博物館事務室との２カ所において行っている。

書類綴りの状態になっている資料についてその内容を確認し、必要事項を記録する (b)。

記録された必要事項を精査しつつ「資料一覧」を作成する。また、精査に必要な情報を得るため、当該期東本願寺発行の機関誌『宗報』などによって、人事異動･布教所開設などに関する記事を整理しているので、それらと比較検討する (a)。

作成された「史料一覧（原案)」と対比し、内容を確認した資料を適正な形態にまとめて保存可能な状態にする (b)。

デジタル・アーカイブ資料室

大谷大学所蔵貴重資料のデジタル・アーカイブ構築

室長・准教授　松浦 典弘
（東洋史学）

本学に所蔵された多くの貴重な文献資料を半永久的に保存し活用していくため、資料をデジタル・アーカイブ化し、分類整理・保存する作業を引き続き進めていく。

2010年度から継続中の、本学図書館所蔵古典籍を書誌データベースとして登録する作業を行い、2015年度には約1,200件のデジタル・アーカイブ化を進めた。

また、大谷大学の学内学会による様々な学術刊行物をデジタル化して公開する課題について、デジタル化自体については概ね合意を得ることができているため、今後鋭意進めていくことになるであろう。但し、公開に関しては、慎重な意見が多く、当面は非公開とする見込みである。

2016（平成28）年度「指定研究」研究組織一覧（追加）

■指定研究「西蔵文献研究」嘱託研究員の追加　（2016年10月１日付）

研　究　名	研究課題及び研究組織	
西蔵文献研究	研究課題	チベット語文献及びパーリ語貝葉写本のデータベース化
	研究代表者	三　宅　伸一郎
	研　究　員	三　宅　伸一郎（准教授・チベット学）
		上　野　牧　生（短期大学部講師・仏教学）
	嘱託研究員	武　田　和　哉（准教授・人文情報学・歴史学・考古学）
		白　館　戒　雲（本学名誉教授）
		U. Erdenebat（モンゴル国立大学総合科学部教授）
		清　水　洋　平（本学非常勤講師）
		髙　本　康　子（北海道大学スラブ･ユーラシア研究センター共同研究員）
		伴　真　一　朗（2015年度西蔵文献研究嘱託研究員）
		舟　橋　智　哉（2015年度西蔵文献研究嘱託研究員）
		山　口　欧　志（奈良文化財研究所研究員）【追加】
	研究補助員(RA)	LAMAO ZHUOMA（博士後期課程第３学年）
	(RA)	ARILDII BURMAA（博士後期課程第２学年）

2015（平成27）年度「一般研究」研究成果概要

共同研究

スティラマティの倶舎論注釈書『真実義』梵文写本第一章の研究

研究代表者・名誉教授　小谷 信千代
（仏教学）

本研究は、ヴァスバンドゥの『倶舎論』に対するインド撰述注釈文献のうち、最も大部にして最も詳細な注釈である、スティラマティ（安慧）の『真実義』サンスクリット写本の解読を目的とする。研究の手順として、研究代表者である小谷がサンスクリットテクストとその試訳を準備したうえで、大谷大学にて定期的に研究会を開催し、研究協力者と共同で検討することを繰り返すというかたちで、研究を遂行した。さらに本研究は各年度に６葉づつの解読を目指す研究計画に基づいて遂行されており、本年度は昨年度に引き続き、第一章「界品」のうち、「十八界の解説」附論箇所の解読を試み、サンスクリットテクストを確定した上で、試訳を完成させた。

またそれらの作業と並行して、サンスクリット文献ではスティラマティの『中辺分別論釈疏』『五蘊論釈』やヤショーミトラの『倶舎論釈』との平行句を、チベット語訳文献ではプールナヴァルダナの『倶舎論注』との平行句を同定した。そして何より、漢語でしか現存しないとされてきたサンガバドラの『順正理論』のサンスクリット文、並びにこれまでいかなる資料からも回収しえなかった有部阿含の経文を回収することができた。

従来の研究においてスティラマティという人物は、ヴァスバンドゥの著作群に対する一注釈家としてのみ捉えられてきた。しかし本研究により、スティラマティ自身の背景、歴史的文脈の一端が少しずつ明らかなりつつある。具体的には、(1)『順正理論』の文脈を精密に捉えながら、スティラマティが『倶舎論』の注釈書を著した事実を窺い知ることが可能である。(2) またアビダルマ教義学に着目すれば、チベット文のみでは確定困難であった議論の脈絡を丹念に辿り、いくつかの点において議論の展開を明確にすることが可能である。というのもスティラマティによる注釈内容は、インド撰述のいかなる『倶舎論』注釈書より詳しく、より大部だからである。この点はスティラマティの力量を伺い知るに充分であり、『真実義』が最重要の注釈書と目される由縁である。

共同研究

デジタルアーカイブ技術による契丹国の歴史考古言語資料の復原的研究と集成

研究代表者・准教授　武田 和哉
（人文情報学）

本研究は、2013年度に採択されて研究班が発足し、2015年度に最終年度を迎えた。

今年度は、成果取りまとめ等に関する打ち合わせ会議を５月・８月・２月に本研究所にて実施した。

また12月と１月には、内蒙古自治区において契丹国時代の遺跡・文物の調査保護等に従事している関係者や中国国内の大学に所属する専門家を招聘し、公開型の研究講演会を２度開催した。

結果的に２冊の報告書を刊行することができ、合計３ヵ年にわたる科研研究班活動の締めくくりとすることができた。

以上の諸活動の詳細については下記の如くである。

１．2015年度活動内容

５月23日～24日
研究班年度当初計画打ち合わせ会議（本研究所）

８月６日～７日
研究班年度当初計画打ち合わせ会議（本研究所）

12月19日～20日
「デジタルアーカイブ技術を用いた契丹（遼朝）の文化財分析および収蔵展示手法」研究集会と平城宮跡資料館の展示技法に関する見学検討会
（独立行政法人奈良文化財研究所平城宮跡資料館小講堂ほか）

１月９日
「遼金時代の歴史学・考古学研究の現在」公開講演会（独立行政法人奈良文化財研究所平城宮跡資料館小講堂）

２．2015年度研究成果物（図書２冊）

武田和哉編　武田和哉・町田吉隆・藤原崇人・高橋学而・福井敏・等々力政彦・宮村綾佳著『「デジタルアーカイブ技術による契丹国の歴史考古言語資料の復原的研究と集成」研究成果報告書』〔平成 25-27 年度科学研究費（基盤研究 (C)・研究課題名「デジタルアーカイブ技術による契丹国の歴史考古言語資料の復原的研究と集成」・課題番号 25370842）成果報告書２〕大谷大学真宗総合研究所一般研究武田科研班 2016. 3（全 170 頁）

武内康則編 豊田五郎・武内康則著　武田和哉監修『豊田五郎契丹文字研究論集』〔平成 25-27 年度科学研究費（基盤研究 (C)・研究課題名「デジタルアーカイブ技術による契丹国の歴史考古言語資料の復原的研究と集成」・課題番号 25370842）成果報告書１〕・〔契丹国の総合的研究２〕松香堂書店　2015.12（全 420 頁）ISBN：978-4879746948

共同研究

日本における西洋哲学の初期受容―フェノロサの東大時代未公開講義録の翻刻・翻訳―

研究代表者・教授　村山 保史
（西洋哲学・日本哲学）

本研究の目的は、清沢満之（1863−1903）と高嶺三吉（1861?－1887）の遺稿中に発見された東京大学在学時の哲学関係講義録（ノート）を翻刻・翻訳してE. F. フェノロサ（1853－1908）の講義内容を公開することであり、この作業を通じて日本における最初期の哲学思想受容過程の一側面を解明することである。そのため、本研究では以下の三つの研究課題を設定している。(1) 講義録の編集、(2) 講義録の思想的分析、(3) 清沢における西洋哲学受容の思想的分析。2015年度は、研究課題（1）から（3）すべてを重点課題とした。

研究課題（1）に関しては、「清沢満之フェノロサ講義自筆ノート」と「高嶺三吉フェノロサ講義自筆ノート」の翻刻・翻訳に関する本研究の総括的な成果として、2016年３月に、監修・解題 村山保史、翻刻・翻訳・校閲 竹花洋佑、西尾浩二、朴一功、渡辺啓真、Michael Conway『フェノロサ「哲学史」講義』（続）、全262頁を出版した。

研究課題（2）（3）に関しては、代表的な研究成果は以下のものである。①藤田正勝『清沢満之が歩んだ道―その学問と信仰―』、法藏館、2015年、②村山保史他『曽我教学―法蔵菩薩と宿業―』（共著）、方丈堂出版、2016年、③マイケル・コンウェイ「阿修羅の琴と大行―親鸞と大拙の理解をめぐって―」（論文）、『現代と親鸞』第32巻、2016年、301-338頁、④竹花洋佑「種の自己否定性と「切断」の概念」（論文）、『日本哲学史研究』第12巻、2015年、82-107頁、⑤藤田正勝「宗教と哲学―清沢満之の思索―」（講演）、京都宗教哲学会第８回学術大会、京都大学、2016年、⑥竹花洋佑「「世界」の存在論的構造―田辺哲学とホワイトヘッドとの一つの接点―」（口頭発表）、日本ホワイトヘッド・プロセス学会第37回全国大会、北海道大学、2015年。

共同研究

モンゴル国カラコルム博物館における歴史研究を基軸とした情報化と国際協働の推進

研究代表者・教授　松川 節
（モンゴル学）

本研究は、諸外国との国際的協働によってモンゴル国カラコルム博物館収蔵の考古歴史遺物の研究を推進するとともに、同博物館の高度情報化をめざし、研究成果を情報展示によって地域に還元し、博物館を核とした地域振興策を新たに提案することを研究目的としており、二年目にあたる2015年度は、歴史学・情報科学分野で松川は2015年５月１日～５月10日までモンゴルで調査を行い、カラコルム博物館の情報化（iPad電子ガイド）について同博物館のデジトマー研究員と意見を交換した。また松川は2015年12月22日～12月30日、2016年３月10日～３月16日にそれぞれモンゴルで調査を行い、カラコルム博物館のG. ナランゲレル館長、モンゴル科学アカデミー歴史考古研究所のS. チョローン所長と『勅賜興元閣碑』レプリカ制作についてそれぞれ意見を交換した。

これらの研究成果の一部は、2015年４月18日に大谷大学で開催された研究集会「カラコルム博物館におけるモンゴル・日本共同研究の諸相」、2016年２月26日に大谷大学で開催された研究集会「モンゴル史研究の新展開 II」において報告され、また、カラコルム博物館の高度情報化については、日本教育工学会第31回全国大会（2015年９月、於：電気通信大学）と情報処

理学会第77回全国大会（2016年３月、於：慶應義塾大学）において研究協力者の平澤泰文（大谷大学）と松川が研究報告を行い、評価を受け、コンテンツの改善にフィードバックすることができた。地域振興策研究分野においては、研究分担者の清水奈都紀が2015年４月と2016年３月にモンゴル国ハラホリン現地で世界遺産と地域振興をテーマにワークショップを開催した。

共同研究

紋章との比較による系譜の図像化規則とその構造分析

研究代表者・教授　柴田 みゆき
（情報処理学）

欧州の紋章は、個人の家系情報や社会的地位等を、その時代の変動にあわせて表象したものである。紋章は国家機関への登録・認可の手続きを経て作成されるが、この際に紋章の構成を説明する詳細な文字情報が付随的に必要となる。従って、紋章情報が内包する情報を整理できれば多分野の学術研究に供することができる。しかし、紋章鑑のデータベースなど、国家機関の介在以前の紋章情報のみを集約したものは、家柄や個人の続柄等が特定できるものばかりではない。

2015年度は、欧州の紋章情報が内包する情報を整理し､学術研究に供しうるデータ集積の要件を調査した。その上で、複数の系譜のどれを適用したものかを保存するデータエリアが既存の系図ソフトウェアに存在しないことを指摘し、改良案を提示した。

これに付随して、従来より開発してきた系図表示のためのデータ管理手法WHIteBasEとそのプロトタイプソフトウェアを利用し、将来的に本研究の成果を実際に表示するための改良を検討した。この結果、ユーザが任意に指定した範囲の結合関係を維持したまま縮退および復元を行う手法JaBBRoWを提案するに至った。これらを軸として、系図表示全般に関する研究を進め、以下の結論を得た。

１つ目は、日本の神話において「モノザネ」と呼ばれる事象に基づく下位世代の発生が語られるが、この事象を、医療による子の発生と同じアルゴリズムと図像化規則で、１つのイベントとして表示させる手法を提案した。

２つ目は、プロトタイプソフトウェア改良研究に関して、系譜史料･資料間の異説を比較検討するために、破綻なく系図化するための要件を調査した。

３つ目は、散在するすべての縮退対象個性を、それぞれ重複領域の無いJaBBRoWで包含するための探索アルゴリズムを検討した。

以上の結果を2016年３月に開催された第78回情報処理学会全国大会（神奈川）で発表した。

共同研究

アブラナ科植物の伝播・栽培・食文化史に関する領域融合的研究

研究代表者・准教授　武田 和哉
（人文情報学）

本研究は、東アジアの米主食文化では中心的副食として食されてきたアブラナ科植物について、いつ頃から日本列島に伝播･受容され､どのように栽培が広まったのか、またその栽培技法や食文化などの諸問題に関して、農学系・人文学系の研究者の協業により実施するものである。歴史・考古学などの資史料や、品種の遺伝学的背景や成果等を融合させた総合的研究を目指しており、日本国内やアジア各地において、関連する国際条約や国内法等に留意しつつ、各地における栽培形態・食用文化・利用方法や関係技術等を対象に含めた各種の調査を行っていく予定にしている。

発足２年目となった2015年度は、まず４月に仙台市内において研究代表者・分担者らによる打ち合わせを実施した。次いで４～５月には韓国国内での調査、６月には中国雲南省内での現地調査活動を相次いで行ったが、雲南省内での調査終了後に西安市にある西北農林科技大学を訪問して合同での研究セミナーを実施し、昨年度に引き続き研究者間の交流活動を行った。８～９月はウズベキスタン共和国で調査を実施した。最終的には、２月に国内での栽培状況・市場等調査も兼ねて総括会議を開催し、今年度の調査成果等を共有し、情報交換・今後の活動方針に関する議論等を行った。

以上の諸活動の詳細については下記の如くである。

４月17日～18日
科研班年度当初打ち合わせ（東北大学大学院生命科学研究科・同 農学研究科）

４月25日～５月１日
韓国国内調査（ソウル市･大田市･水原市･仁川市）

６月27日～７月４日
中国国内調査・西北農林科技大学訪問（雲南省昆明市ほか・陝西省西安市）
７月２日
西北農林科技大学合同人文学農学学融合セミナー（西北農林科技大学楊陵キャンパス）
８月23日～９月１日
ウズベキスタン共和国内調査（タシケント市およびホラズム州・カシュカダリヤ州ほか）
２月24日～26日
2015年度研究成果総括会議、栽培状況・市場等調査（愛媛県松山市ほか）

共同研究

文化地質学：人と地質学の接点を求めて

研究代表者・教授　鈴木 寿志
（地質学）

文化地質学はオーストリー国発祥の学問分野で、ザルツブルク大学のフェッタース教授が提唱した（Vetters, 2003: *Mitt. Österr. Geol. Ges.* **93**, 181-185.）。研究代表者の鈴木は、2014年の地質学会鹿児島大会にて文化地質学の講演会を日本で初めて開催した。この大会を皮切りに、興味をもった研究者10名で科学研究費補助金研究を進める運びとなった。

文化地質学とは、地質学と人文科学の学際領域であり、人と地質のかかわりについて研究する学問分野である。その研究に際しては、地質学者が地質と関わる文化事象を研究する場合と、人文科学者が自身の専門の中で地質に関する部分を選んで研究する場合がある。本共同研究では科研分担者の中で、特に大谷大学を拠点とする４名で研究を行った。以下に各研究者の研究成果概要を示す。

焼酎蔵とシラス台地の関係［鈴木寿志］：鹿児島県日置市の小正醸造を訪問した。醸造所は沖積面より一段高い場所にあるが、その縁からは地下水が湧出しており、利用されてきたという。近隣のサツマイモ畑は水はけの良い台地上に展開していた。小正醸造の立地は、台地・台地縁辺湧水という薩摩の地形・地質と密接に関わってきたことが分かる。

ドイツ文学と地質学［廣川智貴］：本年度は、これまで地質との関係があまり論じられることのなかった詩人ヘルダーリンを中心に研究した。彼の友人のひとりにヨハン・ゴットフリート・エーベルという人物がいる。地質学者エーベルのアルプス研究は、山の背後に存在する神を現前化せしめたという意味で、ヘルダーリンにとってきわめて重要なものであることを明らかにした。

仏教と地質［清水洋平］：本年度は、初期の仏典にでてくる地質（岩石や鉱物）についての文献調査を実施した。なかでも、現代の仏教文化との接点が見出しやすい、仏教徒として最も大切にされる布薩に関わる石である「結界石」に視点を当て、界を設定するための目印としての役割を確認した。

弘法大師伝説にみられる地質［石橋弘明］：地質と人々の営みとのかかわりを探るべく、民俗学、その隣接分野である宗教学・歴史学と地質の接点として弘法大師伝説に着目した。弘法大師伝説には、高知県安田町に伝わる「くわず貝」の話など地質産物（この場合は貝化石）にまつわる例がみられる。それらを再確認して紹介し、伝説が生まれた背景について考察した。

個人研究

タイ国を中心とする東南アジア撰述仏教説話写本の研究

研究代表者・本学非常勤講師　清水 洋平
（仏教学・南伝仏教）

本研究は、タイ国を中心に従来より同地に継承されたクメール文字で記された貝葉写本を中心に、同国に流布する東南アジア独自撰述の仏教説話写本を調査・収集し、その網羅的な研究を目指すものである。具体的には、①従前の科研プロジェクト「タイ国中部地域の王室寺院が所蔵する東南アジア撰述仏教説話写本の研究」を承け、その研究課題の中で作成した同地域の寺院が所蔵する貝葉写本の文献タイトルのみを記した所在目録を改善し、国内外の研究者、研究機関の要望に的確に応え得る新たな所在目録・データベースの構築を行う。②次に、仏教説話文献をより深く探究する手段として、その鍵となる「アーニサンサ」と呼ばれる一群の積徳行に関わる釈義文献の基礎的な文献研究を行うという２つのアプローチを取る。

①については、約1,700套（一套の中に複数の文献が所収されることが多い）の貝葉写本に所収される文献情報に関して、個々の文献の写本資料としての資質

（例：同一タイトルの文献であってもその内容分量に異なりがあり、同一文献に複数のヴァージョンが存在する可能性）が整理され、文献ごとに様々な既出の所在目録との横断的な整理がなされた一次資料の所在目録及びデータベースを構築した。

②については、*Sabbadāna-ānisaṃsa*と題名が付されるパーリ語アーニサンサ文献に着目し、今まで未開拓であったタイ仏教の積徳行に関わる釈義文献の文献学的研究をスタートさせることができた。

本年度には、①、②で得られた研究成果の一部を「タイ国中部地域の王室寺院が所蔵するクメール文字写本について」と題した論文に取りまとめ『佛教史學研究』第58巻第１号に公表した。また、東南アジア撰述仏典写本の中の稀覯本について、研究協力者である田辺和子氏（（公財）中村元東方研究所）と共に『アユタヤー期後期作製ワット・フアクラブー寺院所蔵の絵付折本紙写本』と題した書籍を出版した。

個人研究

インド・チベットにおける般若学の研究

研究代表者・名誉教授　白館 戒雲
（仏教学）

『現観荘厳論』とハリバドラ著『明義釈』は、『二万五千頌般若経』に基づいて大乗の理論と実践を明らかにするが、チベット学問寺で「五大学科」の一つ「般若学」の主要テキストになっている。その最重要の註釈がツォンカパの法嗣タルマリンチェン（1364-1432）著『心髄荘厳』である。当該研究者は藤仲孝司氏と協力して和訳研究を続けているが、３年間の研究の最終年度、平成27（2015）年度には、以上三つの典籍の第７章「一刹那現観」、第８章「法身」、第９章「摂義」の和訳を行い、これで一応、全体の和訳が完成した。そのうち、第１章の加行道の部分を研究した成果を、拙稿「タルマリンチェン著『現観荘厳論の釈・心髄荘厳』第１章より「順決択分」の和訳研究２」、『成田山仏教研究所紀要』（39、2016）に発表した。

副次的な研究として、『倶舎論』に関して、チム・ジャムペルヤン著『倶舎論の註釈』（通称「チムズー」1280年頃）の校訂を行った。これもチベットの「五大学科」の一つ「倶舎学」のテキストになっているが、チムの註釈が最重要である。前年度から前半４章に着手し、その校訂版『チム・ジャンピーヤンの著書『チムゼー』の典拠を示す日月（前編）』（2016）を出版した。

ツォンカパ著『菩提道次第大論』は、『現観荘厳論』の教誡でもあるが、すでにその校訂版を作成し、前半３分の２の和訳研究を発表した。本年度は残りの「観の章」の研究を継続しており、2017年に発表する予定である。

さらに、上記のタルマリンチェンとチムに基づき、有身見（個体観念）に基づく外道の思想を検討したものが、拙稿「チベット仏教における六十二見」（立正大学法華経文化研究所編『三友健容博士古稀記念論文集　アビダルマ佛教の展開』2016）である。

個人研究

共感覚の進化的基盤を探る

研究代表者・講師　高橋 真
（比較認知科学）

共感覚とは、ある刺激に対して通常の感覚（e.g.視覚）だけでなく、別の感覚（e.g.聴覚）が生じる知覚現象である。「音を味わう」や「数字に色がついて見える」などの特殊な知覚経験が共感覚症として知られているが、「黄色い声」や「高音・低音」、「明るい声・暗い声」といった比喩表現とも関連していると言えよう。共感覚が生じた理由（選択圧）を知るためには、ヒト以外の動物との比較研究が重要となる。そこで、本研究はラット・ハムスターなどのネズミ目の種、および、魚類のキンギョが共感覚的な知覚を示すかどうかを検討した。

本研究では、テレビの砂嵐のような視聴覚のノイズの共通性を動物がヒトと同様に知覚しているかを検討するため、聴覚的ノイズと一致する視覚刺激（視覚的ノイズ）と一致しない視覚刺激（直線運動）に対する動物の選好（好み）を調べた。その結果、ネズミ目のラットやハムスター（高橋・谷内・別役・藤田、2013）だけでなく、キンギョにおいても、聴覚的なノイズに対して一致する視覚刺激と一致しない視覚刺激に対する選好に違いが生じていることが明らかになった（Takahashi, & Taniuchi, 2015）。すなわち、ヒトからの系統発生の遠いキンギョにおいてもヒトと同じように共通性を知覚している可能性が示された。

これらの研究から、共感覚が比較的広い範囲の種に

存在している可能性が明らかになった。特に、キンギョが共感覚的知覚を示したことから、その起源は魚類まで遡ることができる。したがって、水中で未分化であった感覚経験が人間の共感覚的知覚の基盤の一つである可能性が示唆された。

引用文献

高橋真・谷内通・別役透・藤田和生 2013 ラット・ハムスター・ヒトの共感覚『日本心理学会第77回大会発表論文集』, p571. 2013年９月19日 札幌コンベンションセンター.

Takahashi, M. & Taniuchi, T. (2015). Synesthesia-like perception in Goldfish.『日本動物心理学会第75回大会. 2015年９月11日 日本女子大学目白キャンパス.

個人研究

『中辺分別論』の未解読 チベット語註釈写本の研究

研究代表者・本学非常勤講師　松下 俊英
（仏教学）

本研究は、大谷大学図書館所蔵のチベット蔵外文献に収められている、『中辺分別論』のチベット人による註釈写本を研究対象とし、当該写本の読解を目的としている。

研究対象写本は、『中辺分別論』の偈を朱字で書き、世親による註釈を黒字で書き記している。貴重写本であることから、まずは写本を撮影し、その画像データにもとづき翻字テキストを作成した。その際、偈の部分については、北京版・デルゲ版テキストとの対校を行い、同様に世親釈についても大蔵経との対校を実施した。この校訂テキストに基き本年度は、翻訳作業を中心に進めた。

『中辺分別論』は、チベット語訳・漢訳ともに弥勒の五部に収められ、弥勒が偈頌を無著に伝え、それに対して世親が註釈を施したものと言われる。弥勒は兜率天に在すると伝承されることから、実在性の真偽が未だ明らかとなっていない。

対象写本にも、著作についての記述が示されている。冒頭部分には文殊師利法王子に対する帰命の偈頌が説かれる。その箇所の註釈として、「この論の偈頌は弥勒によって造られた。註釈は無著によって語られた。これの復註は安慧によってなされた」と書かれている。その後には、自身が信仰する神々を尊敬して註釈を行う旨が示されるが、このような註釈は安慧の復註に類似する。すなわち神々を尊敬しているのは世親なのである。チベット語註釈者はこの意図を汲みとり、その直後に世親が弥勒と自身の師である無著に帰依していることを表明している。

以上のことから、偈頌が弥勒、註釈は無著、復註が安慧であることが明らかにされた。さらに弥勒・無著の名を並列に挙げる点から、当該写本ではあたかも弥勒を無著の学兄の如く見ていると考えられる。それは世親が弥勒と無著に対する帰依の表し方にも一致しているといえる。したがって、当該写本においては、弥勒は無著が慕った実在の人物だと考えることができることを示唆していることが明らかとなった。

個人研究

移行期正義の社会的影響に関する比較社会学的研究

研究代表者・教授　阿部 利洋
（社会学）

移行期正義政策の中でもとりわけ紛争記憶の公的表象、すなわち紛争被害の公式の意味づけに焦点をあてた現地調査を行うと同時に、社会的な文脈・歴史的な背景を異にする複数の移行期正義プログラムを包含する理論的枠組みの整理に取り組んだ。

まず、従来、多様な個々のプロジェクト――国際法廷、真実委員会、公職罷免、（象徴的・物的・金銭的）補償、各種制度改革等――をどこまで移行期正義のカテゴリーに含めるかという点から行われがちであった定義を、移行期正義が行われる「移行期社会」の条件・特徴を反映する形で行い、そこからの偏差によって個別のプロジェクトの性格を認識できるという立場を採用した。次に、移行期正義研究全般にわたる傾向として、どのプロジェクトに対しても否定的な評価が下される点に着目し、それがどのような理由によって生じているのか、検討した。結果として、移行期正義プログラムを構成する主要な４要件、すなわち公的なアナウンス、動員、公的イベントにおける共通体験、ネーションビルディングのそれぞれの不十分な実施状況が、各プログラムに対する否定的評価の基本的形式であるとの視点を得た。

2015年度の成果は以下の通り。

1. 阿部利洋、2016、「創造的な逸脱の許容――南アフリカ真実和解委員会と移行期正義」、遠藤貢編『武力紛争を越える――せめぎ合う制度と戦略のなかで』（京都大学学術出版会）、211－238。

2. Abe, Toshihiro, 2016, Creating Space for Productive Deviance: The Latent Function of the Truth and Reconciliation Commission of South Africa, in Sam Moyo and Yoichi Mine eds., *What Colonialism Ignored: 'African Potentials' for Resolving Conflicts in Southern Africa,* Bamenda: Langaa RPCIG, 173-202.

3. Abe, Toshihiro, 2016, Ebb and Flow of Assemblage in Cambodian NGO Movements: Diaspora Returnees' Human Rights Initiatives on the Khmer Rouge Tribunals, in Shigeharu Tanabe ed., *Communities of Potential: Social Assemblages in Thailand and Beyond,* Chiang Mai: Silkworm books, 85-104.

4. Katsaura, Obvious and Toshihiro Abe, 2016, Mediated Multinational Urbanism: A Johannesburg Exemplar, *Social Dynamics*, 42(1), 106-121.

個人研究

依存に関する責任帰属を評価するための概念的基盤の構築

研究代表者・元任期制助教　佐々木 拓
（倫理学・17-8 世紀イギリス道徳哲学）

本研究の目的は、依存症患者の依存関連行動に関する責任について、部分的な免除(部分的帰責)を論じるための概念枠組みを自由意志研究の立場から導出することであった。これには（1）脳神経科学で想定されている依存理解と責任条件の究明、(2)「全般的能力と局所的能力の区別によるアプローチ」という責任の分析枠組みの提出という２つの課題がある。

依存症患者への部分的帰責の問題の困難は、依存症患者が一見十分な行為者の能力を備えているように見えるなかで、依存行動に関連した行為にのみ責任を免じることが求められる点にある。課題（2）は、依存症患者の責任能力を行為全般に関わる「全般的能力」と、特定の行為の遂行にのみ必要な「局所的能力」に区別し、前者の保全と後者の欠如をもって部分的帰属を説明しようという試みである。そこで、本研究ではまず脳神経科学倫理学における関連文献をサーベイし、課題（1）に取り組んだ上で、その成果で得られた依存症の諸特徴に照らして、局所的能力の内実の究明がなされた。

そこでまず明らかになったのは、脳神経科学倫理からのアプローチの多くが結果として全般的能力を扱っており、その結果部分的帰属が困難になっていることである。次いで、脳神経科学倫理で扱われている心理学的能力を局所化し、責任論上の意味を与えるには伝統的な他行為可能性の能力が必要になる点が示された。この能力は、伝統的に重要な責任能力とされていたが､それは全般的能力としてであった。本研究では、「統制的原理適用可能性アプローチ」を提案し、これをもちいて、自由意志概念を局所的能力と捉え直し、局所的責任の説明根拠とした。これにより、今後の脳神経科学倫理研究に一定の枠組みと方向性を与えることに成功した。

個人研究

ハンス・リップス解釈学におけるパトスを基盤とした知識教授理論の研究

研究代表者・准教授　田中 潤一
（教育学・教育哲学）

ドイツの哲学者ハンス・リップスの解釈学的論理学の研究を、下記の２方面から行った。(1) 解釈学における論理学と知識論の理論的研究、(2) 解釈学を基盤とした教授理論研究。

まず知識の成立構造の解明について、「非人称構文」と「日常的な言葉の使用」の視点から研究を進めた。とりわけ非人称構文では、「今・ここ」という直接的所与がまず非人称構文で表現され､そこから「述語化」が起こり、さらに述語の対象として「主語」が生じるというプロセスを解明した｡さらに解釈学における｢語り方」とりわけ「隠喩」の役割について考察した。また教授理論研究では、特に道徳科の授業における実質陶冶（政治的・経済的教養）の重要性を指摘した。さらに道徳の授業を４類型化しそれぞれの指導法を提示し、その中で「メタファー」型指導法についての試論を考察した。

研究業績は、(1) に関しては、研究論文２本、学会

発表２回。

研究論文「ハンス・リップスにおける言葉と教育の問題」(『関西教育学会年報』第39号、平成27年８月)、「解釈学的論理学における知識生成とその超越的根源」(大谷大学哲学会『哲學論集』第62号、平成28年２月)、学会発表「解釈学的論理学における知識習得と「語り方」の考察」(教育哲学会第58回大会一般研究発表、平成27年10月、於：奈良女子大学)、「ハンス・リップス解釈学における知識生成と超越的視座の省察」(大谷大学哲学会春季研究会、平成28年３月、於：大谷大学)。

(2) に関しては研究論文１本、海外学会発表１回。

研究論文「道徳科の内容と指導法に関する一考察」(大谷大学教育・心理学会『人間形成論研究』第６号、平成28年３月)、学会発表 "The Principle of Citizenship Education and the Role of Teachers in Japan –On the Standpoint of Hermeneutic Philosophy–" (27th Annual JUSTEC Conference第27回日米教員養成協議会年次大会、平成27年９月15日、於：アメリカ合衆国フロリダ州ペンサコラ)。

個人研究

初期チベット論理学成立史解明のための基礎研究

研究代表者・教授　福田 洋一
(仏教学)

本研究課題の目的は、チベット仏教後伝期にどのようにしてチベット論理学が形成されていったかを研究するための基礎資料を提供することにある。2002年にデプン寺で、これまで散逸したと考えられていたカダム派の古写本が発見された。それらは2008年以降、順次『カダム全集』として影印出版されている。そこに初期チベット論理学の典籍が24点含まれている。これらの文献は草書体の写本であり、誤記や省略もあって、そのままで内容を研究するには適さない。本研究課題では、それらをテキストデータに入力し、全体を検索できるようにするとと同時に、科段を抽出し、それらの比較を通じて、いくつかのチベット論理学独自の術語について、用例を通じて研究できるツールを提供している。

2015年度は以下の４点の入力を行った。これまでに入力したり、提供を受けたテキストも含め、11点のKWIC検索をWeb上で公開している。

１．チャパ・チューキセンゲ『量・心の闇の除去』
２．著者不明『量の善説・無垢なる精髄の甘露』
３．ツルトゥン・ションヌセンゲ『量・般若灯論』
４．(伝) ロンチェン・ラプジャムパ『量・真実要義』

また次の著作は、全三章のうち第一章の入力を終了した (公開は全体の入力が済んでからにする)。

５．チュミクパ・センゲペル『量決択注』

本研究課題が提供しているKWIC検索では、検索したい単語を予め想定していないと検索をすることができない。そこで、これらの文献に使用されている単語を抽出・登録するプログラムを開発した。

他に研究成果として、研究代表者・研究分担者・研究協力者が各自のテーマに従い論文執筆あるいは研究発表を行った。

個人研究

前近代中国黄河中流域における水利権と水利組織

研究代表者・准教授　井黒 忍
(東洋史学)

本研究の目的は、15～19世紀の中国黄河中流域 (陝西省東部・山西省南部・河南省西部) において、１) 水利権がいかに認識され、売買・貸借などの契約関係の中でどのように取り扱われたのか、２) 民間の水利組織がどのように成立し、水資源の管理・分配および水利権移転にいかなる役割を果たしたのかの二点を明らかにした上で、３) 異なる地域間の比較を通して、資源管理システムとしての持続性の差異とそれぞれの歴史的意義を評価することである。

その成果として、まずは2015年６月６日㈯に京都府立大学にて開催された、「権力・地域と平和」をテーマとする第17回洛北史学会大会において、研究報告「中国近世の水利をめぐる紛争と秩序―黄河中流域の事例に基づく水利組織の検討を中心に」を行った。水利組織は水冊に基づく自律的な管理・分配を通して水利秩序の維持に主体的な役割を果たし、公権力は水冊の認可と発給という間接的な形と水利紛争の裁定という直接的な形で水資源の管理と分配に関与したことを論じた。

また、2015年６月25日㈭にはオランダ・デルフト市にて開催されたWater History Conference 2015に参

加し、研究報告“Water Management Organisations in Premodern China”を行った。石刻や文書の形態で売買契約書が現存する山西省の事例を用いて18～19世紀の清朝治下における水利権売買慣行を考察し、陝西省における事例を比較材料として検討を行った。当該事例からは売買の一方の当事者として村や水利組織が契約書に名を連ねるという興味深い状況が見て取れるとともに、これには生存および生業活動のために水利権の商品化を防ぎ、地域外への水利権の移転を阻止するという狙いがあったことを指摘した。その他、碑刻資料および水利遺跡の調査を目的として、2015年８月24日㈪から８月31日㈪にかけて中国陝西省渭南市区における現地調査を実施した。

個人研究

傷痍軍人職業保護事業で整形外科医が果たした役割についての歴史的研究

研究代表者・元任期制助教　上田 早記子
（社会学）

現行の障害者に対する支援は戦後になり突如として出現したわけではなく、戦前における取り組みが時と共に蓄積、発展し、現在の形となっている。しかし、戦前と戦後との繋がりについて明らかになっているものは少ない。障害者の就労支援を遡ると江戸時代の三弦や三療、明治時代における特殊教育などをあげることができる。そのうち傷痍軍人に対する職業保護は、他とは異なり軍人対策という限界や傷痍軍人のみを対象としているという限界があるものの、急激に推進され、多様な対策が講じられていった。そして、傷痍軍人に対する職業保護は現行の障害者の就労支援と類似する対策が国によって講じられており、現行の就労支援対策との繋がりを考えていく上での歴史的位置付けは大きいといえる。

本研究は、特に傷痍軍人職業補導所を取り上げ、整形外科医がどのように関与し、職業補導の発展に寄与したのか。さらに、戦後どのように引き継がれたのかを明らかとするものである。

傷痍軍人職業保護対策には、職業補導や職業準備教育、就職斡旋などがある。現在までの研究において、職業補導を実施していた傷痍軍人福岡職業補導所では九州帝国大学の整形外科医である神中正一や稗田正虎が関与したことによって、①義肢などの機能を向上させ、②義肢の装着後の訓練を改善し、③作業訓練を開発した結果、傷痍軍人に対する就労支援技術が急速に向上したことが明らかとなった。また、職業準備教育などを実施していた臨時東京第三陸軍病院では整形外科医である水町四郎や児玉俊夫が関与していたことが明らかとなった。ただし、水町や児玉が義肢製作などに関与していたかは現在調査中である。

また、傷痍軍人職業保護の戦後のあり方を検討する中で、戦中に開発改善した技術が戦後、新たな分野である理学療法や作業療法、職業訓練（障害福祉分野の就労支援）と名乗り、引き継がれていったことが現在までの研究で明らかになった。

個人研究

『タットヴァールタスートラ』シッダセーナ注を中心とするジャイナ教の戒律解釈史研究

研究代表者・元本学非常勤講師　河﨑 豊
（インド学・仏教学）

本研究は、ウマースヴァーティ（ウマースヴァーミン）によって著された代表的なジャイナ教の綱要書『タットヴァールタスートラ』に対する、白衣派における最初の本格的な注釈であるシッダセーナ注を中心資料とし、シッダセーナ以前のジャイナ教諸文献、また空衣派の『タットヴァールタスートラ』諸注釈をも資料として用いながら、ジャイナ教における戒律特に不殺生をはじめとする五つのヴラタ（誓戒）の解釈史を解明することを目的とする。本年度は、予備的な作業として以下のことを行なった。

1．『タットヴァールタスートラ』第七章シッダセーナ注の電子テキストを作成し、そのデータをresearchmapに実装されている資料公開機能を用いて試験的に公開した。また、当該研究課題に関わる二次文献についても継続的に入手し、その暫定的なリストを作成した。このリストは最終年度にて公開する予定である。
2．『タットヴァールタスートラ』第七章シッダセーナ注を、その冒頭から読解する作業を行なった。次にこの読解作業と平行して、空衣派系統の注釈であるプージュヤパーダ作『サルヴァールタシッディ』、アカランカ作『ラージャヴァール

ティカ』を随時参照し、比較検討した。最後に、特に不殺生（アヒンサー）のヴラタについて、白衣派聖典および聖典諸注釈における解釈を調査し、その成果の一部を「飢えと屍肉 ―何のための食事か―」と題し『印度民俗研究』15号に公表した。

３．2015年８月にドイツ連邦共和国エアフルト大学で開催された第21回 World Congress of the International Association fo the History of Religions に参加し、当該研究課題について諸研究者と情報交換を行なった。また同学会において、不殺生の掟に関連するものとして、テーラワーダ仏教における方便の概念について、特に方便による殺生の容認という問題を視野に入れつつ、予備的な研究発表を行なった。

個人研究

口承と文献学の融合に基づくチベット後期中観思想研究

研究代表者・特別研究員　西沢 史仁
（仏教学・チベット学）

2015年度は、当初の計画通り、チベット古文書研究会を発足、『チャンキャ教義書』中観派章の購読部門と、サンプ寺ニマタン学堂シェーラプジンパ著『中観学説決択集』のクンイク（隠字体）で記された古写本の解読部門を平行して開催した。同研究会は、真宗総合研究所において、九回（2015/6/26-28; 9/7-8; 10/15-17; 11/4-6; 12/16-19; 2016/1/6-9; 2/16-19; 3/8-11; 3/28-31）にわたり、集中的に開催して、前者の部門では、『チャンキャ教義書』中観派章総論及び自立派章（蔵学出版社本pp. 190-281）の全体を購読、計画通り、その全訳を達成し、さらには、次年度に購読を予定していた帰謬派章の購読にも入ることが出来た。

他方、後者の部門では、三宅伸一郎連携研究者とトゥプテンガワ氏の協力を得て、「クンイク（skung yig）」と称される特殊な隠字体で記されたテキストの読解作業を開始した。その研究成果の一部は、第63回日本チベット学会のチベット学情報交換会において、三宅連携研究者と共同で、「sKung yigについて」という題目で発表した。

『チャンキャ教義書』の解読に際しては、チャパ・チューキセンゲの『中観東方三論提要』や『善逝と外教徒の学説弁別』（別名：『チャパ教義書』）ツォンカパの『善説真髄』、ケードゥプジェの『提要大論』、セラジェツゥンパ、パンチェンソナムタクパ、ジャムヤンシェーパ等の中観論書を参考資料として、『チャンキャ教義書』の思想的背景を解明する作業を開始した。その研究成果の一部は、日本チベット学会において、「チャパ・チューキセンゲの中観思想」という題目で発表、同学会誌に掲載される予定である。

個人研究

綱島梁川を中心とした明治･大正期の宗教思想研究のための基盤構築

研究代表者･元本学非常勤講師　古荘 匡義
（宗教哲学）

近年の明治以降の宗教に関する研究においては、内村鑑三や清沢満之、近角常観などの宗教者が主宰する集会・雑誌等が形成する宗教的な共同性の解明が進んでいる。これらの共同性が特定の宗教・宗派に基づいているのに対し、本研究で扱う綱島梁川（1873～1907）を軸とする集会（「梁川会」）や回覧ノート（『回覧集』）が形成する共同性は、特定の宗教・宗派の縛りのない、ゆるやかで自由な雰囲気の共同性である。このような綱島を軸とする共同性を解明することは、明治・大正期の宗教的共同性の多様性を示すために不可欠の研究である。しかし、現状ではこの解明に必要な資料が十分に整備されていない。そこで、本研究では『回覧集』を翻刻し、『回覧集』の分析を通して綱島を軸とする共同性を明らかにすることによって、明治・大正期の宗教的共同性の研究に新たな資料を提供し、この時代の宗教的共同性の多様性を描出する。さらに綱島が同時代の人々に与えた影響を解明し、この時代における綱島の思想の位置を明らかにする。

平成27年度には以下の４点を実施した。①岡山県高梁市立図書館の「梁川文庫」を調査し、蔵書への書き込み状況も含めた資料の全リストを作成した。②高梁市有漢生涯学習センターに所蔵されている綱島梁川関連の資料の一部を調査した。具体的には、未公刊資料の内容を分析するとともに、蔵書への書き込み状況を調べた。③『回覧集』全７巻の画像データを入手し、部分的に翻刻を実施した。④清沢満之をはじめとする近代仏教の研究者との交流を深めながら、西田幾多郎･西田天香らとの影響関係について分析し、明治後期に

おける綱島思想の重要性を明らかにした。

平成28年度には、『回覧集』の翻刻を進めつつ、明治・大正期の宗教思想の研究者との共同研究を展開し、口頭発表や学術論文の形で研究成果を公表していく。あわせて、綱島と同時代の思想家の文献蒐集とその分析も進めていく。

個人研究

ダデウシュ・カントルの演劇と能に描かれた死の表象の精神分析理論による考察

研究代表者・教授　番場 寛
（フランス文化・フランス文学）

2015年８月26日より29日までパリの「国際ラカン協会」の夏のセミナーに参加し、ジャック・ラカンの『セミネール 第24巻』についての研究発表を聞く。そこでは、後期ラカンが、トーラスと呼ばれるトポロジーを使った説明を具体的な臨床場面や文学作品の解読にそのように応用できるかが話し合われていた。

そのセミナー終了後、資料収集を行った後ポーランド、クラクフに移動し、９月１日より４日まで、タデウシュ・カントルの資料館クリコテカの調査と、カントルの家で現在は旧クリコテカとなっている資料館と作品の背景となったクラクフの調査、合わせてカントルの劇に影響を与えているアウシュビッツ・ビルケナウ強制収容所跡の調査を行う。悲惨で非人間的な強制収容所の実態をガイドのフランス語の説明で理解することができた。そしてその歴史的事実がカントルの劇に出てくる父親の死の背景を説明していることが分かった。クリコテカでは、カントルの劇に使われた舞台装置や彼の短い舞台作品のすべてを映像で観ることができた。さらにそこの売店ではカントルの主要な劇作品のDVDやパンフレット類を購入することができた。

帰国後10月３日に佐渡に渡った目的は、世阿弥が流された地であり、プロの能楽師だけでなく民衆に能が伝承され島のあちこちで薪能として演じられていると言われている佐渡の能の現状を調査することと、今回の研究テーマである「死の表象」がその日に薪能として実際に演じられる「葬上」にどのように現れているかを鑑賞することであった。

12月18日から３日間池袋の東京芸術劇場で、カントルの劇団にいた女優のリュトゥカ・リーバ女史の演劇のワークショップに参加し、カントル自身の演出方法の一端を伺うことができた。

12月21日に研究成果の一部を公開する目的と能の死の表象を能楽師のシテである河村晴久氏からじかに説明していただきたいという目的で、「カントルと能」という公開講演会を行った。

個人研究

情報検索分野を中心とした、可視化技法の応用に関する研究

研究代表者・准教授　酒井 恵光
（計算機科学）

はじめに

真宗総合研究所 2015 年度「一般研究」酒井班では、「情報検索分野を中心とした、可視化技法の応用に関する研究」というテーマで研究を進めた。本稿では、一般研究の成果として、情報検索のための可視化システムに関する問題の分析とモデル化、およびプロトタイプ実装に関して述べる。

研究の概要

社会における情報機器とネットワークの普及により、多くの人にとって、大量の情報へのアクセスが可能となった。結果、それらの情報をいかに活用するかが大きな問題となっている。本研究では、情報の可視化に関するこれまでの知見をベースに、情報検索の分野を中心として、得られた情報を効果的に可視化し、より効率的な情報収集を実現するシステム構築の基盤づくりのための作業を行った。

情報検索のインタラクション分析

情報検索は、ユーザの求める情報にたどり着くまで、検索結果の表示とその内容の吟味を繰り返し行うインタラクションを必要とする。本研究では、乗換案内の分野を中心にインタラクションの分析を行い、既存システムの多くでは典型的な検索のみがサポートされていること、非典型的な検索の多様性と必要性に関する考察を経て、可視化システムに求められる特性を示した。

プロトタイプシステムの設計・実装

インタラクション分析の結果を受け、本研究ではKamadaによる制約ベースの可視化モデルを採用し、

プロトタイプシステムとなる可視化エンジンVE ０の設計と実装を行った。

図構造データと、図生成のためのビジュアル・マッピング・ルールの記述はS式をベースとし、簡潔かつ柔軟な記述を可能とした。実装にあたっては、Clojureインタプリタと制約解消ライブラリCreamを利用し、JVM上にシステムを構築した。

まとめ

本研究によって、可視化技法の情報検索分野への適用という課題は、問題の分析、実装技術の両面において大きな進展を見ることができた。

個人研究

アビダルマの因果論に関する総合的研究

研究代表者・准教授　箕浦 暁雄
（仏教学）

アビダルマの因果論解明に必要不可欠な未解読文献の解読を目的とし、未解読の江戸期講義録に限定して調査を行った。

まず、大谷大学図書館所蔵『大乗五蘊論聞書』（口述者・著者不明）の翻刻を行い、その一部を「大谷大学図書館所蔵『大乗五蘊論聞書』（一）」（『大谷学報』第95巻 第２号、2016年４月）として公表した。翻刻の続きは今後刊行する予定である。

次に、金沢市立玉川図書館近世資料館所蔵の江戸期アビダルマ関係の講義録を調査した。今回は近世資料館所蔵文献のうち、環定『大乗五蘊論聞記』（写本・講録）、釋神識『阿毘達磨倶舎論』（写本・講録）、『阿毘達磨倶舎論聞記』（写本・講録）、黙恵『唯識三十頌聞記』（写本・講録）を閲覧し写真撮影した。近世資料館所蔵のこれら講義録はいずれも1940年（昭和15年）３月10日に金沢市内にある書店・近八書房から購入されたものとわかった。近八書房は金沢別院門前にある仏教書を扱う書店で、かつては出版も行っていたと聞く。この環定『大乗五蘊論聞記』の内題が記されているところには「天保十己亥夏環定寮司述　大乗五蘊論聞記」との記載がある。これは真宗大谷派「学寮講義年鑑」（『真宗大系』第37巻、国書刊行会、1925年）の記録「天保十己亥夏環定寮司述　大乗五蘊論聞記」と一致する。当該文献は、結城令聞『唯識学典籍志』（東京大学東洋文化研究所、1963年）や、小野玄妙・丸山孝雄『仏書解説大辞典』（大東出版社、1933-1935年、1975年、1978年）でも言及されず、内容が全く知られていなかったものである。

これらは東アジア地域で『五蘊論』研究が行われていた数少ない現存資料ということになる。今回の調査・解読作業により、江戸時代の学僧たちによる学問形成の一端を知ることができた。とりわけ環定『大乗五蘊論聞記』と釋神識『阿毘達磨倶舎論』の解読を今後も継続して進める予定である。

個人研究

隅寺心経の基礎的研究

研究代表者・教授　宮﨑 健司
（日本古代史・日本古代宗教史）

本研究は、奈良時代の古写経や正倉院文書にみえる写経事業を通して当該期の仏教史の解明を目的とするが、具体的には隅寺心経の歴史的意義の解明を目指し、特に同経の現物調査に力点をおくものとなった。調査対象は29点（立命館大学ARC・慶應義塾大学附属研究所斯道文庫・東京国立博物館・根津美術館・山形県立博物館・京都国立博物館・大東急記念文庫・五島美術館・静嘉堂文庫美術館・奈良国立博物館・台東区立書道博物館・東北大学附属図書館・国立歴史民俗博物館・善通寺・太山寺・長保寺）に及び、それぞれ貴重なデータを得ることができた。

所在情報では、新たに東京国立博物館所蔵の手鑑「毫戦」の断簡が確認できたほか、所在不明の植村和堂旧蔵本２点が根津美術館所蔵となっていたことが判明した。遺品相互の関係では、斯道文庫保管のセンチュリー美術館本が個人蔵本と同筆であることが確認でき、現物調査で同筆が確定できた唯一の例となった。また、隅寺心経は博物館や個人の所蔵されることが多いが、山形県立博物館本は当地の有力真言宗寺院・宝幢寺旧蔵で、弘法大師信仰との関係で近世に出羽の地まで分布していたことが確認できたことも興味深い。

隅寺心経は、本来、複数部数を成巻したものだが、遺品の多くは一巻のみで巻子装・軸装などに改装されて原装が明確でない。この原装を想定する上で、今回、海龍王寺本（10紙）・根津美術館本（14紙）を調査できたことはきわめて重要であった。天地界の状況から、

海龍王寺本10紙は、第１紙、第２～３紙、第４～10紙の３断簡、根津美術館本14紙は、第１紙、第２～３紙、第４紙、第５紙、第６～第14紙の５断簡からなることがわかったが､天地の法量は検討を要するものの、海龍王寺本の第５紙から第９紙の紙幅（41.4糎～42.0糎）、根津美術館本の第５紙から第９紙の紙幅（40.１糎～40.6糎）は少なくとも原寸と想定される。両者の法量の相違を誤差とみるかは判断の難しいところであるが、実際の隅寺心経は制作時期にも幅があったことを考慮すると､時期の相違とみることが穏当であろう。いずれにしてもこれら紙幅の法量は今後の真贋などを含めた調査での重要な基準になると考える。

個人研究

触法知的障害者に対するピアサポーティブな更生支援活動の実践とその評価

研究代表者・教授　脇中 洋
（発達心理学・法心理学）

本研究は、矯正施設における知的障害等が疑われる受刑者に対する教育プログラムを調査しながらその効果検証を行うものである。2015年度は播磨社会復帰促進センターの障害受刑者を対象とした特化ユニットにおいて、導入的な教育プログラムと位置づけられているクラウニング講座に着目して調査を行い、その効果検証を目指した。

具体的には2014年度末から概ね週１回90分開講されていたクラウニング講座（全16回）の第９クールに参加して、プログラム内容と受講者の反応を観察しながら記録に残すとともに、受講生と受刑作業を担当する刑務官を対象とした質問紙調査を５回実施した。

その結果、講座開始時と終了時では、「自分の意見を言う」「相手が先に手を出しても自分はやり返さない」「張り合いがあってやる気がある」「ありのままの自分を出せる」といった質問項目において受講生全体の評定平均値の上昇が見られ、「しばしばイライラする」では下降していた。これらの結果から、人前で自己主張することへの抵抗が軽減していることは対人的コミュニケーション上好ましい変化と言えるかもしれない。しかしこのような変化が通常の受刑作業と矛盾なく両立できているのかどうか、また出所後の社会復帰に貢献できているのかどうかについて検討を深めていくことが、今後の課題であろう。

一方、カナダや北欧の更生保護施設を各１週間程度ずつ訪問して調査を行い、日本の矯正施設や更生保護事業との比較検討を行った。今後知的障害等のある受刑者が社会復帰していく上で、ピアサポーティブな更生支援が達成できるためには、文化的背景を越えてどのような条件が必要であるのかを明らかにしていく予定である。

海外学会参加・研究調査報告

第 14 回国際チベット学会および 第 6 回北京国際チベット学セミナー参加報告

西蔵文献研究　研究代表者・准教授　三宅 伸一郎

今年夏は国際的なチベット学関係の学会が２ヶ所で開催された。一つは、６月19日～25日の日程でノルウェー王国ベルゲン市にあるベルゲン大学で開催された第14回国際チベット学会であり、もう一つは８月２日～４日の日程で、中国・北京にある中国蔵学研究中心で開催された第６回北京国際チベット学セミナーである。西蔵文献研究からは今年度も両学会にメンバーを派遣し、研究成果の発表と海外の研究者との交流を行った。国際チベット学会には三宅が、北京国際チベット学セミナーにはツルティム・ケサン（白館戒雲）嘱託研究員が派遣されたが、北京国際チベット学セミナーには三宅も参加・研究発表を行ったため、本稿では両学会の報告を三宅が合わせて行うこととする。

国際チベット学会は、回を重ねるごとに参加者が増大し、第14回目を迎える今回は、世界各国から約400名もの参加者を集める巨大な大会となった。特に報告者の目にとまったのは、欧米の大学・研究機関に留学・研究を行っている若手チベット人研究者の増大である。

53のパネル、23のセッションの内、報告者は、20日午前に開催された小西賢吾氏（金沢星稜大学）が主催するチベット文化圏の東端にある「シャルコク地方」すなわち四川省阿坝州松潘県周辺の社会や宗教の特質と、この地方の果たしたチベット文化への貢献を明らかにすることを目的とするパネル「Tibetology in Sharkhog: history, society and religion on the eastern edge of Tibet」に参加、「sKyang sprul nam mkha' rgyal mtshan (1770-1832) gyis a mdo shar khog la bzhag pa'i mdzad rjes skor la dpyad pa（チャントゥル＝ナムカ・ジェルツェンのアムド・シャルコクにおける業績）」と題する研究発表を行った。18世紀末から19世紀前半にかけて活躍し、「カンド・サンチョー（mKha' 'gro gsang gcod）」と呼ばれる「断境（gcod）」の修行法の再構成者であり、本尊感想法「イダム・クンドゥー（Yid dam kun 'dus）」の創始者でもあるポン教僧チャントゥル＝ナムカ・ジェルツェンはシャルコク出身者ではないが、シャルコクにあるシャンツァン寺（sKyang tshang dgon pa）に招聘され、1828年に同寺の寺主（dgon bdag）に就任したと近年著されたシャンツァン寺の寺史には明記されている。ところが、彼の生涯を知る上で最も信頼すべき彼の直弟子によって著された伝記には、そのような記述は見当たらない。では、彼のシャンツァン寺寺主就任は事実でなないと言い切れるであろうか。チャントゥル＝ナムカ・ジェルツェンの著作の奥書を確認してみると、1828年を境として執筆場所に変化が見られる。すなわち1828年以前の著作のほとんどは、彼が本拠地としたカルモリトー（dKar mo ri khrod）で執筆されているのに対し、1828年以降の著作はシャルコク地方にあるガメ寺（dga' mal dgon）やシャドゥル・リトー（Bya dur ri khrod）で執筆されている。こうした執筆場所の変化から見ると、彼が晩年、自身の活動の拠点をシャルコク地方に移したことが窺え、彼のシャンツァン寺寺主就任を一概に否定することはできないのではないか――というのが報告者の発表の趣旨であった。

報告者による研究発表風景

自身の発表終了後は、主にポン教関係の研究発表を聞いた。21日に終日開催されたセッション９は全てポン教関係の発表であった。セッションの最後に、参加していたフランス在住の著名なチベット人学者サムテン・カルメイ氏が、特にチベット人研究者に対して、「科

学的な研究には資料の時代と場所を明確にせねばならない」との趣旨の短いスピーチを行ったのが印象的であった。

＊　＊　＊

８月２日～４日に、西蔵文化発展保護協会・中国蔵学研究中心・西蔵社会科学院の共催で行われた第６回北京国際チベット学セミナーも、主催者発表で参加者325名（うち中国国内216名、中国国外109人）という巨大な学会であった。期間中、午前８時30分より中国蔵学研究中心の大ホールにて基調講演が行われ、その後、社会、経済、歴史、文化、言語、宗教、医学、芸術そしてサンスクリット写本等、計19の分科会に分かれて研究発表が行われた。基調講演には全て英語・中国語・チベット語の同時通訳がつき、分科会にも通訳がおり、例えば、報告者はチベット語にて研究発表を行ったが、その要旨がその場で英語・中国語に翻訳された。

ツルティム・ケサン（白館戒雲）嘱託研究員は「古代史」の分科会にて「Gong ma lha btsan po srong btsan sgam po dang nang chos（ソンツェンガムポと仏教）」と題する研究発表を、報告者は「宗教１」の分科会にて「Bon gyi rnal 'byor pa skyang sprul nam mkha' rgyal mtshan gyi bon chos dbyer med kyi lta bar dpyad pa（ポン教の瑜伽行者チャントゥル＝ナムカ・ジェルツェンのポン教・仏教無分別の思想について）」と題する研究発表を行った。

なお、閉会式の場において、ツルティム・ケサン嘱託研究員が中国蔵学研究中心の特任研究員を引き続き委嘱されたことが発表された。

閉会式で特任研究員の委嘱状を受け取る
ツルティム・ケサン嘱託研究員

タイ国王室寺院ワット・プラチェートゥポン（通称ワット・ポー）並びにワット・ラーチャシッタラーム所蔵の貝葉写本に関わる共同研究調査

西蔵文献研究　嘱託研究員　清水 洋平

2016年９月７日㈬から９月15日㈭にかけて、タイ国首都府バンコクに所在する第一級王室寺院Wat Phra Chettuphon（通称Wat Pho）並びに第二級王室寺院Wat Ratchasittharam所蔵のパーリ語貝葉写本に関わる調査を、同嘱託研究員の舟橋智哉と共に実施した。

今回の調査は、前回の調査（2014年３月16日～３月22日に実施）と同様、マハーチュラーロンコーン大学大学院研究科長でWat PhoのPhra Suthithammanuwat（Ven. Dr. T.マライ）長老から、Wat Phoが所蔵する貝葉写本についての共同研究調査の許可が得られ（王室寺院の中でも格式の高い同寺院が所蔵する貝葉写本は､「タイ王室版」として知られ大切に保管されており、調査の許可が認められることは殆どない）、更にタイ国中部地域で手つかずの貝葉写本の所蔵量が最大級とされるWat Ratchasittharamが所蔵する貝葉写本の再調査許可も得られたために実施したものである。

上記のVen. T.マライ長老のコーディネートのもと、National Institute of Development AdministrationのK. Nathineek講師、並びにDhammachai InstituteのA. Sutus氏の協力を得ながら、大谷大学が所蔵するタイ王室寄贈を機縁としたクメール文字パーリ語貝葉写本（「大谷貝葉」）と関係の深い稀覯文献を中心に調査を行った。

Wat Phoに関しては、*Saddhammasaṅgaha*（第１結集からはじまる仏教史等を記すもの）に関する写本文献の写真撮影を行うことができた。しかし、前回の調査で撮影できなかった*Paṭipattisaṅgaha*（在家の実践すべき教えを５章（５束）にまとめた文献：「大谷貝葉」

では１束欠損）については、今回も時間内に確認することができず画像資料として収集することはできなかった。

Wat Ratchasittharamに関しては、時間的な制約もあったが、同寺院のVen. Weera Thaweero長老のご尽力で、タイ国で大いに発展したアーニサンサ文献群の一部(９束)を写真撮影することができた。これらは、「大谷貝葉」に含まれる同種の文献を考察する上で貴重な資料となるものである。

尚、９月11日には、今後タイ国の仏典写本のデータベース作成事業で中心的な役割を果たすと予想されるManuscript Conservation Association（MCA：タイ寺院所蔵写本の調査・研究を目的として昨年タイで立ち上げられた研究組織）の中心メンバーであるC. Phibul博士らと、デジタル画像として収集した写本文献資料の活用方法のあり方についての意見交換を行った。この会議では、同氏からMCAの活動への協力要請を受けると共に、両機関が所持する写本データの共有の可能性などについて、継続的に話し合っていくことを確認した。今回、このような意見交換を行えたことは、これからの本研究班の活動方針を考える上で大変有益であった。

Wat PhoやWat Ratchasittharamなど、由緒ある王室寺院とこのような協力関係が築かれている間に出来る限り早く再訪し、今回の調査に続けて「大谷貝葉」に関する稀覯文献の調査・写真撮影を実施したい。

Wat Ratchasittharam の Ven. Weera Thaweero 長老（中央奥）と嘱託研究員２名

大谷大学真宗総合研究所西蔵文献研究班とモンゴル国立大学総合科学部との共同調査 アルハンガイ県ホトント郡の八角仏塔址

大谷大学真宗総合研究所西蔵文献研究班とモンゴル国立大学総合科学部との共同研究プロジェクト「モンゴルにおける仏教の後期発展期（13世紀～17世紀）の仏教寺院の考古学・歴史学・宗教学的研究」の2016年度現地調査は、アルハンガイ県ホトント郡に位置する八角仏塔址を対象として行った。今回は、遺蹟の三次元計測を行う目的で、専門的知識と技術を有する山口欧志氏（奈良文化財研究所研究員）を特別に派遣し、モンゴル国立大学のU. エルデネバト教授とともに９月24日・25日の日程で現地調査を行った。

八角仏塔址（鳥瞰写真）

左よりエルデネバト教授・山口研究員

海外研究調査報告

国際シンポジウム成果出版に向けたバークレー出張

国際仏教研究（英米班）研究員・講師　Michael J. Conway

2016年８月16日㈫から26日㈮までアメリカ合衆国カリフォルニア州バークレー市に滞在し、嘱託研究員のマーク・ブラム教授（カリフォルニア大学バークレー校）とともに、昨年６月に開催された『*Cultivating Spirituality*』出版記念シンポジウムの研究成果出版に向けて、編集作業を行った。滞在中、毎田仏教センターを訪れ、嘱託研究員の羽田信生先生（同センター所長）と情報交換し、また、西本願寺の教育機関の米国仏教大学院（Institute of Buddhist Studies）のデイビッド・マツモト教授に会うことができた。更に、８月19日㈮に浄土真宗センターで開催された沼田記念講演会に参加し、講師のジェシカ・メイン准教授（ブリティッシュコロンビア大学）のみならず、米国仏教大学院の教授陣と交流した。以下に、それぞれについて詳しく報告する。

2015年の６月26日㈮・27日㈯に、本研究班は、国内外から研究者を招聘し、2011年に刊行された *Cultivating Spirituality: A Modern Shin Buddhist Anthology*の出版記念シンポジウムを開催した。ロバート・ローズ研究員（本学教授）とマーク・ブラム嘱託研究員の編集によるその書物には、清沢満之、曽我量深、金子大栄、安田理深の代表的な著作の英訳が収録されているが、その著作の背景にある歴史的文脈とその思想家が持つ歴史的意義が必ずしも英文の読者にとっては明瞭になっていないので、シンポジウムには、その文脈と意義を明らかにすることのできる研究者にお招きし、二日間にわたって発表と討議を重ねた。その際、発表者と協議し、成果を欧米の学術出版社から論文集を出す計画の方向性を確かめた。そこで、シンポジウムでの議論を受けて発表者は論文を修正し、拡充したフルペーパーを今年の春に提出するように締切が設定された。

バークレー市に着いて、ブラム嘱託研究員の研究室を訪れた時に、最初に取りかかった作業は目次の確定であった。近年、清沢満之と精神主義について日本語で多数の研究論文が発表されているから、それらをも論文集に反映すべきであると考え、シンポジウムの発表に含まれない論考を四つ選定して英訳し収録することを決めた。現段階では、研究論文と原典翻訳を含めて20章からなる形を予定している。

続いて、協力して出版社に提出するための出版計画書を作成した。日本における清沢満之と精神主義の意義を紹介し、この論文集がどのようにこれまでの英文研究を補足し、補充するかを説明した文章の下書きを筆者が拵えて、ブラム教授と協議して、最終稿に仕上げた。また、それぞれの章についての要旨を作成し、またはシンポジウムの時に提出された著者の要旨を修正し、企画書に加えた。現在、ブラム教授は、この企画書を利用して、英文学術出版を手がけてきた大学出版社と交渉して、出版契約を結べるように働きかけている。

滞在期間の後半には、著者より受領済みの最終稿を読み合わせて、編集者として著者にどのような修正提案をすべきかについて議論した。英文学術出版社より発行される書物は、出版の最終決定の前に、外部査読にかけられて、その査読の結果を反映することが出版の条件となるので、査読者の目線で各論文を精読し、問題箇所を指摘し、著者への提言の内容について話し合った。この作業の結果を順次、著者に伝えている。

８月19日㈮に、2007年から2009年まで大谷大学で研修員として在籍し、泉恵機教授と安冨信哉名誉教授のもとで研究を進めたジェシカ・メイン氏が、「Shin Buddhism and Global Modernity: Settlement Work, Social Work, and Other Brand New Ideas in the Early Twentieth Century」（浄土真宗と全地球的近代―隣保事業、社会事業と20世紀初頭のその他の真新しい発想―）という題目で講演をした。その講演に対して、スコット・ミッチェル教授（米国仏教大学院）とナタリー・クイ氏（米国仏教大学院研究員）が応答した。終了後、発表者を囲んで、懇親会が設けられ、北米の近代仏教研究の動向を把握し、米国仏教大学院の教育課程について情報を得る好機であった。

８月20日㈯には、毎田仏教センターで、定期的に開催されている聞法会に参加した。夏休みの影響もあり、午前中の日本語による会には、アメリカに何十年も暮らしておられる３名の日本人の女性のみが来られてい

た。午後の英語の会には、10名ほどの参加者がいた。筆者は大谷大学に入学する前に、毎田仏教センターの夏の講習会に三度ほど参加したが、この日は、その時の仲間と13年ぶりの再会になった。

８月24日㈬も、仏教学院大学院大学を訪れ、同機関の教務担当副学長を勤めているデイビッド・マツモト教授と会い、今後の研究協力について協議したとともに、本学の真宗学科国際コースの教育プログラムに、米国仏教大学院の教授陣や浄土真宗センターの施設を活用する可能性について話し合った。

なお、26日㈮からロスアンゼルスへ移り、真宗大谷派の世界同朋大会で通訳を務めた。今回の大会も盛会となり、北米で宗教間対話に精力的にかかわっている研究者や仏教伝道協会の関係者と縁を結ぶよい機会となった。

マイスター・エックハルトとヨハネス・スコトゥス・エリウゲナに関する文献資料調査

東京分室ＰＤ研究員　松澤 裕樹

2016年６月４日から６月12日にかけて、東京分室の指定研究である「宗教的言語の受容／形成についての総合的研究」の一環として、文献資料調査のためにドイツ南西部の大学町であるテュービンゲンとハイデルベルクに渡航してきた。

６月４日から６月８日までは、テュービンゲン大学カトリック神学部図書館を中心にマイスター・エックハルト（ca.1260-1328）とヨハネス・スコトゥス・エリウゲナ（ca.815-877）に関する二次文献を蒐集し、これからの共同研究で必要となる文献を手に入れることができた。また、ドイツ国内でも品揃えに定評のあるテュービンゲンの哲学・神学専門の古書店H.P.Williにおいて、Corpus Christianorumの一部として刊行されているエリウゲナの一次文献とエリウゲナの思想に大きな影響を与えた聖マクシモス（ca.580-662）の一次文献を購入してきた。エックハルト全集はすでに大谷大学に全て揃っており、今回購入する予定はなかったが、H.P.Willi店主の話から、エックハルト全集の修正版が５月に刊行されたことを知り、そこで購入できたのは幸いだった。エックハルト全集の修正版は、原文こそ全集版と同じであるが、エックハルトが自らの著作で引用した神学者・哲学者の引用個所が大幅に修正されたものである。全集の修正版は、まだ第一巻が発刊されたばかりだが、全五巻となる修正版が全て発刊されることで、エックハルトがいかなる神学者・哲学者からいかなる思想的影響を受けたのかという思想史的研究が進み、エックハルト研究がさらに発展することが期待できる。

６月９日には、テュービンゲンからハイデルベルクに移動し、ハイデルベルク大学哲学部助手で中世哲学を専門とするRoberto Vinco博士と会合し、最近のドイツにおける中世哲学研究の動向や最近出版された重要文献に関する情報交換とお互いの研究に関する意見交換を行った。また、中世哲学を専門とするドイツと日本の若手研究者を集めた研究会の可能性についても同時に話し合ってきた。

６月10日には、テュービンゲン大学カトリック神学部において「神学における哲学的根本問題」を担当するJohannes Brachtendorf教授と会合し、2016年２月にテュービンゲン大学哲学部に提出した博士論文の出版に関する話し合いを行った。Brachtendorf教授は現在編者としてSchöningh出版社から新たなアウグスティヌス全集（ラテン語―ドイツ語対訳版）の出版を進めている関係で、博士論文もSchöningh出版社から出版されることが決定した。また、Brachtendorf教授は2017年春に日本への渡航を予定しており、その機会を用いて講演会を開催する可能性についても話し合ってきた。

今回のドイツでの研究調査を通して、共同研究で必要な資料を入手できたことに加え、海外の研究者との交流をも深めることができた。2016年４月に開室したばかりの東京分室をこれから研究の一大拠点としていくためにも、海外の研究者との関わりは必須であり、今後、海外の研究者を招いた研究会の開催に向けて着々と準備を進めていきたいと思う。

ミャンマーにおける都会カレンと田舎カレンのギャップ

東京分室ＰＤ研究員　田崎 郁子

この夏、科研費研究活動スタート支援と大谷大学真宗総合研究所指定研究からの経費支援を受け、１ヵ月半に渡る海外調査を行うことができた。調査の目的は、タイとミャンマーに居住するカレン民族の事例から、プロテスタント・キリスト教の受容を通じたローカルな言語と社会の動態を明らかにすることである。本稿では、調査中の１つのエピソードからフィールドワークの様子をお伝えしたい。

ミャンマー滞在期間中、ビルマ語のできない私の通訳兼調査助手として、ノポレ（仮名）という20歳のカレン人大学生が付き添ってくれた。彼女はヤンゴンで生まれ育ち、海外出稼ぎをする叔母の家族を訪れシンガポールへ２回も観光に行ったことがあり、ミャンマーでは裕福な部類に入るだろう。スマホ片手にポップスを楽しみ、ボーイフレンドとの会話に興じ、ファッションに敏感な都会っ子である。加えて、家族全員がカレンだというアイデンティティを持ちながらも家庭での会話は全てビルマ語であり、彼女自身高校生時代にカレン神学校夜間部へ通学し英語教育を受けたことで初めてカレン語に触れた経験を持つため、私との会話ももっぱら英語である。一見すると彼女のどこがいわゆる「少数民族」なのだろうか、と思わされ、彼女との会話だけでも十分に、タイ側のカレンとの違いが実感できた。

調査期間の後半、彼女とカレン州のパアンという小さな町に滞在する機会を得た。念のためノポレに、私と同行することが可能か確認し、彼女の両親の了解も取ったうえで、である（ミャンマーでは未婚女性が一人で旅行することなど想定されておらず、今回もノポレの叔母の紹介で海外からわざわざきた私のために、女性２人で行ったこともない遠方の町に外泊することが、仕方なく許可されたのだろう）。パアンの町について１日目、NGOでの聞き取りを終えて５時頃ホテルに戻るとノポレは、「母が夕方以降の外出は控えろと言った」と、早々とホテルに籠る宣言をした。様子の分からない町だしそれも仕方ないかと、本当はもっと様子を伺いたかったが私もそれに従うことにした。

翌日、翌々日と教会やいくつかの村を回る調査中も、ノポレはスマホで母親にどこで何をしているのかを逐一報告している。パアンでは常にNGO関係者、教会のスタッフなど数人のカレンの大人と一緒に行動しているにも関わらず、ビルマ軍とカレンがほんの数年前まで揉めていた地域に来た時などは「こんなところまで来るなんて、母がもうそれ以上は行っちゃダメだと言っている」「早く帰ろう」と小声で言い始める。パアンのカレンの人と話をしていると、ヤンゴンがまるで異世界のような遠くにある感覚にもなれば、ノポレのこの同じ国の同じカレンの中にいるのだとは思えないような発言まで、ミャンマーの都会のカレンと農村部のカレンのそのあまりにも大きな隔たりに、私は驚きを隠せなかった。

そして３日目の夕方、ホテルに戻るとさらに驚くべきことが待っていた。なんとノポレの母親とその親族が５人総出でヤンゴンから自家用車に乗り、今夜はるばるパアンまで来ると言うのである！それを私に伝えるノポレの嬉しそうなこと。ノポレはカレンで、私たちはカレン州に来ているのだが、土地勘もない私たちがたった二人で遠方にいるのが余程心配だったのだろうか。彼女の母親とその親族は、翌朝私とノポレに会うと安心した表情を浮かべ、周辺の観光地を数か所周り、ノポレを残してヤンゴンへ帰って行った。

ノポレやその家族にとっては、カレン州を中心に政府への抵抗運動を続けたカレン民族解放軍が遠い他所の話であり、逆にビルマ軍からの襲撃に怯えタイ側との難民キャンプを行き来する中で暮らしてきたカレン州の村人にとっては、ビルマ語しか話せず海外へ観光にも出かけるヤンゴンのノポレの暮らしはおとぎ話のようなものなのだと、ミャンマーにおける都市と田舎のギャップが分かりかけた出来事であった。

2016年夏、ミャンマーのカレン神学校での聞き取りの様子

国内研究調査報告

教如上人関係史料調査報告

教如上人研究　研究員・講師　川端 泰幸

2016年度前期、教如上人研究班では４回の史料調査を実施した。いずれも研究課題である教如上人関連史料を所蔵する寺院に赴いての調査である。

【西念寺調査　2016年５月２日㈪】

京都市山科区の西念寺で調査を実施した。西念寺は、本願寺第八代・蓮如上人の門弟として有名な「道徳」を開基とする寺院である。今回の調査では、慶長10年（1605）に教如上人から授与された寿像をはじめ、本願寺第８代蓮如上人筆の六字名号、第９代実如上人筆六字名号、第10代証如上人筆六字名号など、歴代本願寺住職から与えられた重要な法宝物類を調査・撮影することができた。また、西念寺の由来を書いた由緒書も多く残存しており、西念寺初代の道徳が蓮如上人の門弟となった経緯や、それ以後、東西分派に際して東本願寺・教如上人に随った経緯などについても詳述されていることがわかった。

【本誓寺調査　2016年５月21日㈯～ 23日㈪】

2016年５月21日㈯～ 23日㈪にかけて、新潟県上越市にある本誓寺において法量の計測や、調書の作成、新たな整理番号の付加、写真撮影などを主たる作業内容として調査を実施した。３月の予備調査において所在確認ができなかった、教如上人寿像を見つけることができ、さらに教如上人消息などの実見によって、内容検討を加えることもできた。

本誓寺本堂での調査風景

この調査によって、本誓寺に伝存する法宝物類の全体像がおおよそ把握できるようになったといえる。教如上人との関係ということについてはもちろんのことながら、中世から近世にかけて、真宗の展開に果たした本誓寺の役割の大きさが見えてきつつある。

【光照寺調査　2016年７月25日㈪】

2016年７月25日㈪、京都市山科区の光照寺に赴いて調査を行った。この調査では、慶長２年（1597）に教如上人が光照寺の粟津道古に授与した顕如上人御影をはじめ、かつて蓮如の隠居所であったという由緒をもつ光照寺ゆかりの品を多く調査することができた。慶長２年といえば、関ヶ原合戦の前であり、教如上人は豊臣秀吉によって強制的に門主の立場から隠退させられている時期にあたる。こうした時期に「大谷本願寺釈教如」と名乗る裏書を記して家臣である粟津道古に法宝物を授与しているという事実は、教如が明らかに門主としての自覚を持ち続けていたことを語る非常に重要な証左を得ることができた。

【萬因寺調査　2016年８月11日㈭】

2016年８月11日㈭、京都市山科区の萬因寺で調査を行った。この調査では、教如上人が彫刻したという親鸞聖人木像坐像や、本願寺第11代・顕如上人が授与した親鸞聖人絵伝（４幅）について調査することができた。これは天正５年（1577）に授与されたものであるが、この時期は織田信長と本願寺との石山合戦が戦われている最中にあたる。こうした時期に絵伝を授与したということは、顕如上人が萬因寺の存在を重視していたということであり、そういった寺院が後に東本願寺に所属するという点も、教如教団形成という点を考える大切な手がかりを得ることができた

〔付記〕いずれの調査も、各寺院・ご門徒の皆さまのご理解と全面的な協力のもと行うことができたものである。厚く御礼を申し上げます。

公開講演会・公開研究会

エトヴェシ・ロラーンド大学との共同開催 国際シンポジウム報告

国際仏教研究（英米班）研究員・講師　Michael J. Conway

2016年５月26日㈭･27日㈮に、本学の響流館のメディア・ホールを中心に、学術交流協定校のエトヴェシ・ロラーンド大学との共催によって、国際シンポジウムが開催された。「仏陀の言葉とその解釈」というテーマのもと、本学の教員９名と、エトヴェシ・ロラーンド大学の教員と学生３名の発表に加えて、ハンガリーや日本からの研究者が４名、発表し、基調講演を含めて、合計16本の報告がなされた。25日㈬には、プレ・シンポジウム・イベントとして、ラズロ・ボルヒ教授（エトヴェシ・ロラーンド大学人文学部学部長）から、古代ローマの美術についての講演をいただいた。三日間の交流を通して、2007年から始まった協定校間の関係を深め、発表と質疑応答を通じて、互いの研究関心を共有することができた。発表の主題は、インド・チベット・中国・日本という地域的に幅広い範囲にわたり、仏教の中の様々な伝統における仏陀の言葉の捉え方に触れていたため、発表者間のみならず、聴衆に多方面から刺激を与える良い機会となった。二日間のシンポジウムには、150名ほどの参加者が来聴した。

シンポジウムは、５月26日の10時よりメディアホールにおける開会式で始まった。木越学長の英語による歓迎挨拶の後、ボルヒ学部長からご挨拶をいただいた。そして、今回のシンポジウムに協賛を得た国際仏教学大学院大学の落合俊典学長よりもご挨拶をいただいた。今後、二校間の協力体制を軸に、研究協力者の輪を広げていく予定であるが、今回のシンポジウムにおける国際仏教学大学院大学の２名の教員（今西順吉教授、フロリン・デレアヌ教授）による発表もその試みの一つであった。次に、ハマル教授と井上尚実国際仏教研究班代表より、シンポジウム開催の趣旨説明が行われた。

二日間にわたる発表のスケジュールは、以下の通りであった。

５月26日

10:30 ～ 12:00　セッション１

「The Buddha's Motivations to Teaching and Their Historical Background」（仏陀説法の動機とその歴史的背景）今西順吉教授（国際仏教学大学院大学）

「The Mahāyāna Sūtras as a View of Śākyamuni: Reading the Buddha's Words from the Perspective of His Being」（釈尊観としての大乗経典：存在を通して言葉を読む）織田顕祐教授（本学）

「*Sūtra* and *Abhidharma*: Taking in the Buddha's Words」（経と論：仏陀の言葉を受けとめるということ）箕浦暁雄准教授（本学）

13:30 ～ 15:00 セッション２

「Pali *Appamāda*: The Meaning and Evolution of a Buddhist Ethical Concept」（パーリ語 *Appamāda*（不放逸）：仏教倫理概念の意味と展開）ジュラ・ヴォイティラ教授（セゲド大学）

「The Buddha's Words as Other Power: Focusing on the Idiomatic Expressive Phrase "*saṃdarśayati samādāpayati samuttejayati saṃprahorṣayati*"」（他力としての仏陀の言葉："教示し、励まし、鼓舞し、喜悦せしむ" という表現力豊かな慣用句に注目して）井上尚実教授（本学）

「Treasure Texts on the Age of Decline: Authorship and Authenticity in Tibetan Prophetic Literature」（衰退の時代に関する宝典：チベットの予言文学における著者と真正性）ジョーカ・ゲッレ研究員（エトヴェシ・ロラーンド大学）

15:15 ～ 16:45　セッション３

「The Buddha's Words and Their Interpretations in Vasubandhu's *Vyākhyāyukti*」（世親の『釈軌論』における「仏陀のことばとその解釈」）上野牧生講師（本学）

「"I Have Accorded with the Buddha's Teachings": The *Sutra of Immeasurable Life* and *Upadeśa*」（「我、仏教と相応せり」：『大無量寿経』と「優婆提舎」）加来雄之教授（本学）

「A Change of Heart: On Meditation and Interpretation in Indian Buddhism」（心変わり：インド仏教における禅定と解釈）フロリン・デレアヌ教授（国際仏教学大学院大学）

５月27日

11:00 ～ 12:00　基調講演

「Reconsidering the Methodologies for the Study of Mahāyāna Sūtras after the “Linguistic Turn” in History」（「言語論的転回」以後の時代における大乗経典研究の方法論再考）下田正弘教授（東京大学）

13:30 ～ 15:00　セッション４

「Khotan and the *Buddhāvataṃsaka-sūtra*」（コータンと華厳経）イムレ･ハマル教授（エトヴェシ･ロラーンド大学）

「Tiantai Hermeneutics: Zhiyi's Interpretation of the *Lotus Suātra* Presented in the *Miaofa lienhua jing xuanyi*」（天台解釈学：『妙法蓮華経玄義』における智顗の法華経解釈）ロバート・ローズ教授（本学）

「Daochuo's Creative Quotation Practices」（道綽の創造的引用法について）マイケル・コンウェイ講師（本学）

15:15 ～ 16:45　セッション５

「The ‘True Words’ of the Buddha: *Mantra* and *Dhāranī* in Japanese Esoteric Buddhism」（仏の真のことば：日本密教における真言と陀羅尼をめぐって）モニカ・キシュ氏（エトヴェシ・ロラーンド大学）

「Interpretations of the Eighteenth Vow and Its Fulfillment Passage: In the Thought of Shandao, Hōnen, and Shinran」（第十八願文と成就文についての解釈：善導･法然･親鸞を通して）藤嶽明信教授（本学）

「Shinran's Viewpoint on the Buddha's Teachings: The True and Provisional」（仏陀の教説についての親鸞の視座：教の権実を中心に）藤元雅文講師（本学）

各セッションの最後に、質疑応答の時間が設けられ、発表について様々な議論がなされた。セッションの間の休憩時間には、参加者と発表者の間で多くの会話と討論が行われた。また、昼休みは長目に設定し、発表者の間で発表内容を話題に交流する機会が設けられた。基調講演には、東京大学の下田正弘教授にお越しいただき、大乗仏教の起源の究明に当たっての方法論について講演をいただいた。26日の日程終了後に、学内のビッグバレー・カフェにおいて、発表者・参加者が懇談できるレセプションが開かれた。また、27日の全日程終了後には、京都ガーデンパレスホテルにて、さよならパーティが開催された。両日ともに、懇親会では両大学の教員が親しく語り合い、友好の絆を深めた。

シンポジウムの成果を一冊の本にまとめて刊行する予定である。また、第三回の合同シンポジウムを二年後の2018年にブダペストで開催する方向で検討を開始した。

以上のように今回の共同開催シンポジウムは、学術協定校との研究交流活動として大きな前進となり、また今後の協力関係を継続する土台を築く有意義な機会となった。

発表者と関係者の集合写真

ザモルスキー博士による「唯識と浄土」の講演会を開催

国際仏教研究　研究代表者・教授　井上 尚実

７月12日㈫大谷大学響流館マルチメディア演習室にポーランドのヤギェウォ大学(Jagiellonian University)からヤコブ・ザモルスキー博士（Jakub Zamorski）をお招きし、「浄土の信者はなぜ唯識学を必要としているのか―東アジア仏教思想史における“近代教学”」(Why do Pure Land Buddhists need Consciousness-only? “Modern doctrinal studies” of Jōdo Shinshū in the history of East Asian Buddhist thought）という講題のもと、国際仏教研究英米班の2016年度第２回公開講演会が開催された。ザモルスキー氏は、真宗大谷派の浄土教フェロー（2014 ～ 2016年）として奨学金を受給し、大谷大学で博士論文のための研究を行ない、台湾の国立政治大学から今年Ph.D.の学位を授与されたばかりの若手仏教研究者である。今回は、博

士論文のための研究をもとに、曽我量深による「法蔵菩薩=阿羅耶識」論と、中国近代の唯識学に基づいた浄土教解釈論を比較して、それぞれを東アジア仏教思想史に位置づける内容で発表してくださった。

法蔵菩薩の物語を唯識の阿羅耶識論に結びつけて非神話的解釈を提示した曽我の方法は、西洋近代の哲学（カント、ヘーゲル）の影響を受けた清沢満之の思想の延長にあり、「自覚」の宗教としての仏教の本来的主体性を浄土教において明らかにしたものであることを確認され、それが近代中国の浄土教における唯識論の導入と背景や方法を異にすることを論じられた。沈善登（1830-1902）、楊文會（1837-1911）、唐大圓（1890?-1941）らによる唯識学による浄土教解釈は、伝統的な大乗仏教の解釈学を背景にしたものであり、唐大圓の場合には「行在浄土、解在唯識」として、浄土教における「念仏成仏」の正統な理解は唯識に求めるべきであると論じていることを紹介された。また、中国において最初の近代的浄土論を展開した沈善登や楊文會は、大谷派の小栗栖香頂（1831-1905）や南条文雄（1849-1927）の協力を得て近代的な仏教研究を進めており、真宗について批判的な認識をもっていたことも指摘された。日中の近代浄土教学を比較するザモルスキー氏の講演の中で、「共同体としての近代的主観」という方向を発展させた唐大圓らが、同時に社会的活動に積極的に関わる仏教を展開していることが、大谷派近代教学との際立った違いであると感じた。この点を含めて、今後さらにザモルスキー氏の研究から学んでいきたいと思う。

Zamorski 氏

スターリング博士による「坊守」研究の講演会を開催

国際仏教研究　研究補助員・仏教学専攻博士後期課程第三学年　梶　哲也

７月29日㈮大谷大学響流館マルチメディア演習室にルイス・アンド・クラーク大学のジェシカ・スターリング准教授（Jessica Starling）をお招きし、「非尼僧非俗女：仏教界における宗教専門職の女性について」（Neither Nuns nor Laywomen: Female Religious Professionals in the Buddhist World）という講題のもと、真宗総合研究所国際仏教研究英米班の2016年度第３回公開講演会が開催された。本講演は真宗寺院における「坊守」を研究対象としたものであり、特に真宗学科には身近な存在をテーマにした発表であったことから多くの学生が集まり、お話に耳を傾けた。

住職と共に寺院を切り盛りする坊守に関して、スターリング先生は実際にフィールドワークを重ね、研究成果をまとめられた。来客があればお茶を出し、法要があれば本堂の準備し、ご門徒達に応対をする坊守は、常に本堂と庫裏を行き来する。その存在や役割は、教義的に定まっているものというよりもむしろ、口伝による「教え」というような形式で、現在にまで継承されてきたものである。つまり、坊守は、寺院にとっては居て当たり前の存在として仏教界の中で受け入れられておりながら、その教義においては特に関心を持って位置づけられてはいないのである。スターリング先生は、この寺院において尼僧でもなくまた俗女でもない坊守の意義や役割に注目することが、仏教の伝統ではしばしば二元的に語られる、公と私、聖と俗、出家と在家といった言説に対して、新たな切り口をもたらすと指摘する。

「坊守」は私にとっても馴染み深い存在であるため、先生のような視点からその存在を考えることは初めてであり、新鮮な気持ちでお話を伺った。

ここでも参加者による研究交流等がなされた。

Starling 氏による発表の様子

学術交流協定に基づく共同研究

公開講演会開催報告
―モンゴル国立大学エルデネバト先生･ガントヤー先生を招聘して―

西蔵文献研究　嘱託研究員・准教授　武田 和哉

本学真宗総合研究所とモンゴル国立大学総合科学部との学術交流協定に基づく共同研究活動は、今年度は第Ⅱ期の初年度となり、第Ⅰ期３年の積み重ねを踏まえて、さらにそれを深化・展開を目標としている。

今年度も、第Ⅰ期同様に交流活動を行う目的で、モンゴル国立大学より、U.エルデネバト先生とM.ガントヤー先生（仏教学）のお二方を本学にお招きして、共同研究を実施した。その際には、国内の研究者も併せてお招きして、それぞれ下記の日程で公開講演会を開催したので、以下に報告する。

１．公開講演会開催の日時と場所

U.エルデネバト先生招聘に伴う公開講演会

2016（平成28）年５月17日㈫　16時半～ 18時
大谷大学響流館三階・マルチメディア演習室

M.ガントヤー先生招聘に伴う公開講演会

2016（平成28）年６月29日㈬　14時～ 17時
大谷大学響流館三階・マルチメディア演習室

２．講演テーマ・通訳者等

U.エルデネバト氏（モンゴル国立大学総合科学部社会科学系人類･考古学科教授）「モンゴル国における近年の考古学的発掘とその成果」
通訳：松川節（真宗総合研究所長）

M. ガントヤー氏（モンゴル国立大学総合科学部人文科学系哲学・宗教学科教授）「ヴァスバンドゥとバリ・ラマ・ダムツァグドルジの世間についてのアビダルマの注釈の比較 ―『阿毘達磨倶舎論』の第三章に当たる「世間品」（せけんぼん）に対する、著者ヴァスバンドゥ自身の注釈内容と、バリ･ラマ･ダムツァグドルジによる「世間品」の注釈内容との比較― 」
通訳：ボルマー（本学大学院博士後期課程第２学年･西蔵文献研究班研究補助員）

３．各講演会の概要

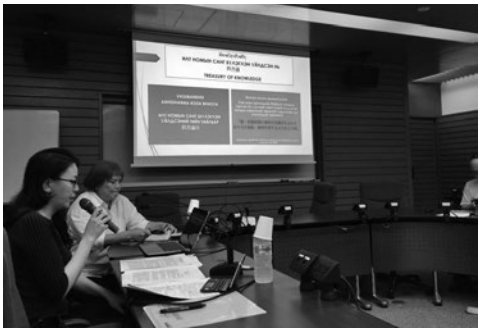
エルデネバト先生のご講演では、モンゴル考古学をご専門にされており、近年の発掘成果についてスライド等を交えつつ紹介と説明を頂いた。

ガントヤー先生のご講演では、日本でも研究が盛んな『阿毘達磨倶舎論』の一節に関する注釈内容について、モンゴル国における研究状況を踏まえた視点からの分析見解を開陳して頂いた。

双方の講演会ともに､研究班外からの参加者があり、双方の講演・研究報告に関して、参加者側の関心はすこぶる高く、数多くの質問や意見が寄せられるなど、総じて活発な意見交換の場となった。

講演会終了後は、当研究班主催の懇親会が開かれ、ここでも参加者による研究交流等がなされた。

2016/5/17
U. エルデネバト先生公開講演会の様子



2016/6/29
M. ガントヤー先生公開講演会の様子

真宗総合研究所彙報　2016. 5. 1 ～ 2016. 10. 31

■研究所関係

◎研究所委員会

◇2016年５月９日㈪ 13:00～13:40（博綜館第５会議室）

１．特別研究員の人事について
２．2016年度研究組織について
３．その他

◇2016年７月13日㈬ 12:20～12:50（博綜館第５会議室）

１．「私立大学研究ブランディング事業」について
２．研究事業の自己点検・評価に関するガイドラインについて
３．2016年度東京分室「指定研究」について
４．報告事項
「寺本婉雅旧蔵資料追加目録」（西蔵文献研究班）について
５．その他

◇2016年７月28日㈭ 15:00～15:40（博綜館第５会議室）

１．「私立大学研究ブランディング事業」について
２．その他

◇2016年10月10日㈪ 13:00～13:30（博綜館第４会議室）

１．『研究紀要』第34号の編集について
２．その他

○2016年度第１回研究員総会

◇2016年７月28日㈭ 17:05 ～ 20:00（響流館３階マルチメディア演習室、Big Valley Cafe）

教如上人研究

【調査】

◇2016年５月２日㈪ 13:00 ～ 17:00

場　所：西念寺（京都市山科区）
内　容：教如上人御影・蓮如上人筆六字名号ほか、寺蔵資料の調書作成・撮影
　西念寺は、『蓮如上人御一代記聞書』の第一条に登場する、蓮如上人の門弟・道徳を開基とする寺院である。本願寺歴代より授与された法宝物類など24点を調査した。
参加者：草野顕之、大桑斉、平野寿則、川端泰幸、工藤克洋、百武涼子、老泉量

◇2016年５月21日㈯～ 23日㈪

場　所：本誓寺（新潟県上越市）
内　容：教如上人消息ほか、寺蔵資料の調書作成・撮影・整理
　真宗大谷派本誓寺は教念を初代とする寺院で、戦国時代、超賢の時代には越後の大名・上杉謙信と親交を厚くし、本願寺と上杉氏との間をつなぐという非常に重要な役割を果たした寺院である。前回の予備調査の際には所在が不明であった教如上人寿像があることを確認するとともに、150点の法宝物類を調査した。
参加者：草野顕之、大桑斉、東舘紹見、平野寿則、川端泰幸、工藤克洋、百武涼子、老泉量、湊悠介

◇2016年７月25日㈪ 13:00 ～ 17:00

場　所：光照寺（京都市山科区）
内　容：顕如上人御影ほか、寺蔵資料の調書作成・撮影
　光照寺は、本願寺第８代蓮如上人が隠居所とした「南殿」の跡地に建立された寺院で、山科の土豪であるとともに、蓮如上人門弟であった粟津氏一族が代々住職をつとめてきたという由緒をもつ。この調査では、教如上人に随従した粟津道古に授与された顕如上人御影など、教如上人ゆかりの品を中心として18点を調査した。
参加者：草野顕之、東舘紹見、川端泰幸、工藤克洋、百武涼子、星津香美、老泉量

◇2016年８月11日㈭ 13:00 ～ 17:00

場　所：萬因寺（京都市山科区）
内　容：伝教如上人作親鸞聖人像ほか、寺蔵資料の調書作成・撮影
　萬因寺はもと真言宗の寺院であったが、本願寺第８代蓮如上人の時代に浄土真宗に改派したという伝承をもつ寺院で、山科地域の寺院としてはたいへんに古い歴史をもつ寺院である。教如上人自作と伝わる親鸞聖人木像や本願寺第11代顕如上人が授与した親鸞聖人絵伝（４幅）についても調査することができた。
参加者：草野顕之、東舘紹見、川端泰幸、工藤克洋、

百武涼子、星津香美、老泉量

清沢満之研究

【ミーティング】

◇第１回ミーティング
日　時：2016年５月17日㈫ 12:10 ～ 13:00
出席者：加来雄之　一楽真　藤原正寿　西本祐攝
井上泰之
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：今年度の活動方針の確認

◇第２回ミーティング
日　時：2016年５月24日㈫ 12:10 ～ 12:50
出席者：加来雄之　一楽真　村山保史　藤原正寿
西本祐攝　井上泰之
会　場：博綜館５階小会議室４
目　的：補遺出版に向けての具体的な検討
未収集資料に関する情報共有

◇第３回ミーティング
日　時：2016年７月14日㈭ 13:00 ～ 14:30
出席者：西本祐攝　井上泰之　荒金拓
会　場：総合研究室
目　的：補遺出版に向けた討議
未収集資料の資料請求について

◇第４回ミーティング
日　時：2016年７月28日㈭ 12:10 ～ 13:00
出席者：一楽真　藤原正寿　西本祐攝　名畑直日児
井上泰之　荒金拓
会　場：真宗総合研究所ミーティングルーム
目　的：収集済・未収集資料の確認
補遺出版に向けた討議

◇第５回ミーティング
日　時：2016年10月13日㈭ 15:30 ～ 17:30
出席者：藤原正寿　西本祐攝　井上泰之　荒金拓
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：今年度の刊行物の検討
補遺構成案の検討
資料収集の出張調査について
研究会開催の確認

国際仏教研究

〈英米班〉

【会議】

◇国際シンポジウム「仏陀の言葉とその解釈」打ち合わせ
①2016年５月６日㈮ 16:20 ～ 18:00（於　真宗総合研究所内ミーティングルーム）
②2016年５月23日㈪ 13:00 ～ 14:30（於　真宗総合研究所内ミーティングルーム）

◇国際研前期活動計画確認
①2016年５月９日㈪ 11:00 ～ 11:40（於　真宗総合研究所内ミーティングルーム）

◇国際シンポジウム反省会及び後期活動計画確認
①2016年６月16日㈭14:30 ～ 16:00（於　真宗総合研究所内ミーティングルーム）

◇2017年度学会パネル発表等打ち合わせ
①2016年９月16日㈮ 16:30 ～ 18:00（於　真宗総合研究所内ミーティングルーム）
②2016年10月21日㈮ 16:30 ～ 18:00（於　真宗総合研究所内ミーティングルーム）

【シンポジウム】

◇International Symposium “The Buddha’s Words and Their Interpretations”
国際シンポジウム「仏陀の言葉とその解釈」
2016年５月26日㈭～ 27日㈮
於　マルチメディアホール（響流館３階）

【公開講演会】

会場はすべて（響流館３階）マルチメディア演習室
①2016年５月25日㈬ 16:30 ～ 18:00
講　師：Prof. László BORHY
講　題：“Representation of celestial spheres and eternal time on vaults and domes in Roman and Early Byzantine art: Interpretation of a Roman Wall-Painting from Brigetio”
ローマと初期ビザンチン芸術における天界と永遠の時間の表現について：
ブリゲティオのローマ様式壁画の解釈
②2016年７月12日㈫ 16:20 ～ 17:50
講　師：Dr. Jakub Zamorski
講　題：Why do Pure Land Buddhists need Consciousness-only?:
“Modern doctrinal studies” of Jōdo Shinshū in the history of East Asian

Buddhist thought
浄土の信者はなぜ唯識学を必要としているのか－東アジア仏教思想史における「近代教学」

③2016年７月29日㈮ 16:20 ～ 17:50
講　師：Dr. Jessica Starling
講　題：Neither Nuns nor Laywomen: Female Religious Professionals in the Buddhist World
非尼僧非俗女：仏教界における宗教専門職の女性について

また上記の他、従来収集してきた仏教関係の洋書・学会誌のデータベース公開のために資料収集・整理を随時行っている。

〈東アジア班〉

2016年９月29日㈭に松川節所長および松浦典弘主事が中国社会科学院歴史研究所を訪問し、王震中副所長らと会合を行った。そこでは、今後の研究交流に関する打合せと2015年12月に大谷大学にて開催した国際シンポジウムの成果出版に関する話し合いがなされた。

西蔵文献研究

【海外出張】

◇６月18日㈯～ 26日㈰
第14回国際チベット学会参加と研究発表（ノルウェー王国ベルゲン市・ベルゲン大学）
出張者：三宅伸一郎

◇８月１日㈪～５日㈮
第６回北京国際チベット学セミナー参加と研究発表（中国・北京・中国蔵学研究中心）
出張者：白館戒雲（嘱託研究員）

◇９月７日㈬～ 15日㈭
タイ国内パーリ語写本関係調査（タイ王国バンコク市など）
出張者：清水洋平・舟橋智哉（ともに嘱託研究員）

◇９月24日㈯～ 25日㈰
モンゴル国立大学との研究協力協定に基づく共同研究に伴う仏塔遺跡調査（モンゴル国ウヴルハンガイ県ハラホリン）
出張者：山口欧志（独立行政法人奈良文化財研究所研究員PD）

【国内出張】

◇６月４日㈯
場　所：宗林寺（富山県南砺市）
目　的：資料の借用
出張者：松川節（真宗総合研究所長）・三宅伸一郎

◇６月４日㈯
場　所：愛知学院大学 名城公園キャンパス（愛知県名古屋市）
目　的：パーリ学仏教文化学会での本学所蔵パーリ語関係資料の報告のため
出張者：清水洋平（嘱託研究員）

【嘱託研究員招聘】

◇５月13日㈮～ 22日㈰
U.エルデネバト氏（モンゴル国立大学総合科学部社会科学系人類考古学科教授･当研究班嘱託研究員）
招聘理由：モンゴル国立大学との研究協力協定に基づく共同研究に伴う学術交流のため

◇５月17日㈫
伴真一朗氏（当研究班嘱託研究員）
招聘理由：モンゴル国立大学との研究協力協定に基づく共同研究に伴う学術交流活動のため

【外国人研究者招聘】

◇６月27日㈪～７月２日㈯
M.ガントヤー氏（モンゴル国立大学総合科学部哲学・宗教学科教授・元：嘱託研究員）
招聘理由：モンゴルにおける仏教受容の諸相についての共同研究・意見交換

【本学所蔵資料調査】

◇９月29日㈭
パーリ語貝葉写本及び付属資料（包み布）の調査
※日タイ修好130周年記念特別展展示品選定のため来学された原田あゆみ氏（九州国立博物館）も調査に立ち会った。

【公開講演会】

◇５月17日㈫　16時半～ 18時（響流館三階・マルチメディア演習室）
U.エルデネバト氏（モンゴル国立大学総合科学部社会科学系人類･考古学科教授）「モンゴル国における近年の考古学的発掘とその成果」
通　訳：松川節（真宗総合研究所長）

◇６月29日㈬　16時半～ 18時（響流館三階・マルチメディア演習室）

M. ガントヤー氏（モンゴル国立大学総合科学部人文科学系哲学・宗教学科教授）「ヴァスバンドゥとバリ・ラマ・ダムツァグドルジの世間についてのアビダルマの注釈の比較 ―『阿毘達磨倶舎論』の第三章に当たる「世間品」（せけんぼん）に対する、著者ヴァスバンドゥ自身の注釈内容と、バリ・ラマ・ダムツァグドルジによる「世間品」の注釈内容との比較― 」
通　訳：ボルマー（本学大学院博士後期課程第２学年・当研究班研究補助員）

【研究員打ち合わせ】
場　所：真宗総合研究所ミーティングルームほか
内　容：研究班の運営・企画・諸問題に関する調整
開催日：５月25日㈬、６月29日㈬、７月27日㈬、９月28日㈬、10月26日㈬

【実務作業担当者ミーティング】
場　所：真宗総合研究所西蔵文献研究班ブースほか
内　容：研究班の実務および作業実施に関する調整等
開催日：５月27日㈮、６月７日㈫、７月１日㈮、９月29日㈭

ベトナム仏教研究
【打合せ】
『日本仏教概説』執筆者の内、原稿未提出者に継続的に督促した。

【ベトナム調査】
◇出張
期　間：８月22日㈪～８月27日㈯
出　張：織田顕祐（研究代表者・個人研究資料費による出張）

◇打合せ等
日　時：８月24日㈬ 10時～ 13時
場　所：ベトナム宗教研究院
参加者：織田顕祐、トゥアン院長、クゥエ・フォン国際室長、フォム･ティー事務局担当、スー宗教研究院研究員、大西和彦（嘱託研究員）
その際の話題は以下の通り。
①大学が申請する「ブランディング事業」の内容に関する具体的な説明と質疑（これはベトナム班の直接の課題ではないが、間接的には関係する）。
②双方の「概説」の進捗状況の確認と今後の方針。
③宗教研究院研究員の日本留学の可能性についての質疑。
④ハノイ地域以外での仏教研究についての情報収集など。

◇資料収集等
日　時：８月24日㈬　昼食後
場　所：ハノイ市内古書店（バッダン書店）
参加者：織田顕祐、大西和彦
その後、大西嘱託研究員と中部フエ地域における仏教研究の情報交換、次回訪越時の研究課題などについて相談、大西研究員の年内一時帰国の可能性とその際の研究打ち合わせについての確認などをおこなった。

大谷大学史資料室
【研究会参加】
◇全国大学史資料協議会西日本部会　2016年度総会・第１回研究会
日　程：2016年５月24日㈫
場　所：関西学院大学 西宮上ケ原キャンパス　関西学院会館 翼の間・風の間
参加者：松岡智美

◇全国大学史資料協議会西日本部会 2016年度第２回研究会
日　程：2016年７月12日㈫
場　所：元興寺文化財研究所
参加者：松岡智美

◇全国大学史資料協議会 2016年度総会ならびに全国研究会
日　程：2016年10月６日㈭～８日㈯
場　所：広島大学　広島大学東広島キャンパス
学士会館２階　レセプションホール
広島大学文書館
酒蔵通り（東広島市）
参加者：松岡智美

【ミーティング】
◇2016年５月30日㈪ 14:00 ～ 16:00
出席者：松浦典弘・戸次顕彰・松岡智美
場　所：真宗総合研究所
内　容：2016年度の活動計画の確認、業務報告など。

◇2016年８月８日㈪　13:00 ～ 15:00
出席者：松浦典弘・戸次顕彰・松岡智美
場　所：真宗総合研究所

内　容：2016年度前期の業務報告と今後の活動について。

【大谷大学史資料室スポット展示関係の作業】
2016年７月15日㈮ 13:00 ～ 14:00
「大谷大学の歴史をたどる～図書館トリビア～」の展示撤収作業
参加者：松岡智美
場　所：大谷大学図書館入口展示スペース

◇2016年９月16日㈮ 14:00 ～ 16:00
タイトル：「年表で見る大谷大学のあゆみ」
参加者：戸次顕彰・松岡智美
場　所：大谷大学図書館入口展示スペース

◇2016年９月30日㈮ 18:00 ～ 18:30
「年表で見る大谷大学のあゆみ」の展示撤収作業
参加者：戸次顕彰・松岡智美
場　所：大谷大学図書館入口展示スペース

上記活動以外にも、大谷大学史資料室では大学史資料の調査・整理や閲覧・質問等への対応を日常業務として行った。

また、展示作業に際しては、大谷大学博物館からの協力を得た。ここに謝意を記す。

デジタル・アーカイブ資料室

【研究会参加】
◇宮内庁書陵部収蔵漢籍画像公開記念国際研究集会
日本における漢籍の伝流　―デジタルアーカイブ「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧」の視角―
日　程：2016年６月４日㈯
場　所：慶應義塾大学三田キャンパス北館ホール
参加者：松浦典弘

SAT（大正新脩大蔵経テキストデータベース現代語訳研究）

仏教伝道協会の英訳大蔵経English Tripitakaに入っている坂東性純、Harold Stewarttによる英訳『歎異抄』の現代日本語訳原稿を検討するミーティングを以下のように行なった。会場はいずれも２号館１階の井上尚実研究室。

４月26日㈫ 18:00-19:30	５月17日㈫ 18:00-19:30
６月14日㈫ 18:00-19:30	６月28日㈫ 18:00-19:30
７月19日㈫ 18:00-19:30	８月３日㈬ 16:20-18:00
９月27日㈫ 16:20-18:00	10月４日㈫ 16:20-18:00
10月11日㈫ 16:20-18:00	10月18日㈫ 16:20-18:00

■東京分室

東京分室指定研究

【出　張】
◇2016年６月４日㈯～ 12日㈰
出張先：テュービンゲン大学、ハイデルベルク大学（ドイツ）
用　務：文献調査及び研究者との会合
出張者：松澤裕樹

◇2016年８月１日㈪～４日㈭、８月31日㈬～９月５日㈪
出張先：ミャンマー・ヤンゴン、タイ・チェンマイ
用　務：東京分室指定研究の一環としてのフィールド調査
出張者：田崎郁子

【研究会】
◇2016年４月27日㈬
内　容：共同研究の企画・考案

◇2016年５月11日㈬
内　容：共同研究「宗教的言語の受容/形成についての総合的研究－哲学的・宗教学的・人類学的視点から－」の提出

◇2016年５月18日㈬
内　容：これまでの研究梗概
発表者：松澤裕樹

◇2016年５月25日㈬
内　容：これまでの研究梗概
発表者：田崎郁子

◇2016年６月１日㈬
内　容：これまでの研究梗概
発表者：藤原智

◇2016年６月22日㈬
内　容：ドイツ出張報告
発表者：松澤裕樹

◇2016年７月６日㈬
内　容：レヴュー: Rafael, Vicente L. 1988. *Contracting Colonialism: Translation and Christian Conversion in Tagalog Society under Early Spanish Rule.* Cornell University Press.
発表者：田崎郁子

◇2016年７月13日㈬
内　容：曽我量深の「往生と成仏」論について
発表者：藤原智

◇2016年９月28日㈬
内　容：和辻倫理学における「間柄的存在」の構造
発表者：松澤裕樹

◇2016年10月５日㈬
内　容：日本古写経『弁正論』と親鸞『教行信証』
発表者：藤原智

◇2016年10月12日㈬
内　容：商品作物と村人との双方向的関係―タイ北部カレン村落におけるイチゴ栽培の導入と労働形態、社会・経済関係の再編
発表者：田崎郁子

◇2016年10月26日㈬
内　容：和辻哲郎の間柄的存在論における宗教性の問題
発表者：松澤裕樹

個人研究田崎班
【出　張】
◇2016年５月14日㈯～15日㈰
出張先：京都大学東南アジア研究所
用　務：ビルマ研究会への参加
出張者：田崎郁子

◇2016年５月19日㈭
出張先：京都大学東南アジア研究所
用　務：第74回「東南アジアの社会と文化研究会」への参加
出張者：田崎郁子

◇2016年５月28日㈯～29日㈰
出張先：南山大学名古屋キャンパス
用　務：日本文化人類学会第50回研究大会への参加
出張者：田崎郁子

◇2016年６月４日㈯～５日㈰
出張先：大阪大学豊中キャンパス
用　務：東南アジア学会第95回研究大会への参加
出張者：田崎郁子

◇2016年６月24日㈮～26日㈰
出張先：同志社大学
用　務：AAS（Association of Asian Studies）年次大会への参加
出張者：田崎郁子

◇2016年６月27日㈪、28日㈫、30日㈭
出張先：京都大学東南アジア研究所
用　務：各種研究会への参加
出張者：田崎郁子

個人研究藤原班
【出　張】
◇2016年６月９日㈭～11日㈯
出張先：真宗大谷派三条別院（新潟市）
用　務：真宗連合学会第63回大会参加
出張者：藤原智

◇2016年７月２日㈯～４日㈪
出張先：大谷大学
用　務：第23回真宗大谷派教学大会での発表及び大谷大学図書館での資料調査
出張者：藤原智

◇2016年９月３日㈯～４日㈰
出張先：東京大学本郷キャンパス
用　務：日本印度学仏教学会第67回学術大会への参加、発表
出張者：藤原智

◇2016年９月10日㈯～11日㈰
出張先：早稲田大学戸山キャンパス
用　務：日本宗教学会第75回大会への参加、発表
出張者：藤原智

個人研究松澤班
【出　張】
◇2016年９月９日㈮～11日㈰
出張先：早稲田大学戸山キャンパス
用　務：日本宗教学会第75回大会への参加、発表
出張者：松澤裕樹

■一般研究出張関係
一般研究武田班②
日　時：2016年５月18日㈬～20日㈮
出張先：勉誠出版株式会社、東北大学大学院生命科

学研究科
用　務：科研班成果物制作の打ち合わせ
出張者：武田和哉

日　時：2016年10月13日㈭～ 15日㈯
開催地：大谷大学真宗総合研究所
用　務：科研班研究活動打ち合わせ
参加者：武田和哉、佐藤雅志、清水洋平

一般研究鈴木班
日　時：2016年６月５日㈰
出張先：千葉県立中央博物館
用　務：「火山がつくった日本列島」展示の調査
出張者：鈴木寿志

日　時：2016年９月10日㈯～ 12日㈪
出張先：日本大学文理学部
用　務：日本地質学会第123年学術大会にてトピックセッション「文化地質学」の運営、ランチョン集会の取りまとめ、口頭発表
出張者：鈴木寿志

一般研究上田班
日　時：2016年５月20日㈮～ 21日㈯
出張先：信州大学長野（工学）キャンパス情報工学科
用　務：情報処理学会の第19回教育学習支援情報システム（CLE）研究発表会への参加
出張者：上田敏樹

日　時：2016年６月３日㈮
出張先：JINS MEME Flagship Store 原宿
用　務：本研究ではバイタルデータ取得用のウェアラブル端末として、学術研究用JINS MEMEメガネの調達を検討している。しかしながら、本製品が一式50万円と高額であることからフラッグシップ店のある用務地に出向き事前に機能を十分把握する。
出張者：上田敏樹

一般研究松川班②
日　時：2016年５月14日㈯～ 15日㈰
出張先：大谷大学
用　務：「ハン・ヘンティ・プロジェクト」2016年度第１回研究集会への参加
参加者：松川節、井上治、白石典之、二神葉子、藤井麻湖、山口欧志

日　時：2016年６月22日㈬～ 27日㈪
出張先：モンゴル科学アカデミー歴史･考古研究所、ガンダン寺学術文化研究所（モンゴル・ウランバートル市）
用　務：モンゴル国における山岳信仰に関する調査･研究
出張者：松川節

日　時：2016年８月７日㈰～ 21日㈰
出張先：モンゴル科学アカデミー歴史･考古研究所、ハン・ヘンティ国立特別保護区行政局、国際モンゴル学会、モンゴル国立大学（モンゴル・ウランバートル市、トゥブ県ムングンモリト郡､ヘンティ県オムノデルゲル郡、バトシレート郡、チンギス市）
用　務：モンゴル国における山岳信仰に関する調査･研究
出張者：松川節

一般研究阿部班
日　時：2016年８月５日㈮
出張先：カンボジア特別法廷裁判部、トゥールスレン虐殺博物館､カンボジア史料センター（カンボジア･プノンペン）、ステレンボッシュ大学、ケープタイムス編集部（南アフリカ共和国・ケープタウン）
用　務：移行期正義の社会的影響に関する現地調査
出張者：阿部利洋

一般研究田中班
日　時：2016年７月２日㈯
出張先：大阪教育大学天王寺キャンパス
用　務：日本ディルタイ協会関西大会シンポジウムでの研究発表
出張者：田中潤一

日　時：2016年７月３日㈰～８日㈮
出張先：Saipan Southern High School（アメリカ合衆国自治領・北マリアナ諸島自治連邦区サイパン市）
用　務：Pacific Circle Consortium 第40回大会 学会発表
出張者：田中潤一

日　時：2016年９月17日㈯
出張先：大阪大学豊中キャンパス

用　務：第十三回「ニーチェ研究者の集い」での研究発表
出張者：田中潤一

一般研究井黒班
日　時：2016年５月25日㈬～ 29日㈰
出張先：嶺南大学（中国・香港）
用　務：国際会議“Empires of Water”への出席
出張者：井黒忍

日　時：2016年９月14日㈬～ 26日㈪
出張先：中国洛陽市・霊宝市・三門峡市・澠池県・北京（碑刻調査）、中国国家図書館（資料調査）、海淀花園飯店（学会）
用　務：碑刻資料・文献資料調査および学会参加
出張者：井黒忍、飯山知保

一般研究西沢班
日　時：2016年５月30日㈪～６月２日㈭
出張先：大谷大学真宗総合研究所
用　務：チベット古文書学研究会開催のため
出張者：西沢史仁

日　時：2016年６月18日㈯～ 28日㈫
出張先：ベルゲン大学（University of Bergen）（ノルウェー）
用　務：第14回国際チベット学会大会参加のため
出張者：西沢史仁

日　時：2016年７月４日㈪～８日㈮
出張先：大谷大学真宗総合研究所
用　務：チベット古文書学研究会開催のため
出張者：西沢史仁

日　時：2016年７月19日㈫～ 22日㈮
出張先：大谷大学真宗総合研究所
用　務：チベット古文書学研究会開催のため
出張者：西沢史仁

日　時：2016年９月３日㈯～４日㈰
出張先：東京大学
用　務：日本印度学仏教学会第67回学術大会参加のため
出張者：西沢史仁

一般研究田鍋班
日　時：2016年９月10日㈯～ 11日㈰
出張先：①名古屋大学東山キャンパス、②早稲田大学戸山キャンパス
用　務：①ハイデガー・フォーラム第11回大会参加のため、②日本宗教学会第75回学術大会参加・発表のため
出張者：田鍋良臣

一般研究藤原班
日　時：2016年８月24日㈬～９月１日㈭
出張先：ビーレフェルト大学図書館Universitätsbibliothek Bielefeld、ベーテルVon Bodelschwinghsche Stiftungen Bethel（ドイツ・ビーレフェルト）シュトルム資料館 Das Storm Archiv（フーズム）
用　務：日本では収集が困難なシュトルム関連の学術文献ならびに障がい児教育に関する文献を入手する。また現地における最新の研究動向を調査する。
出張者：藤原美沙

一般研究田崎班
日　時：2016年６月11日㈯～ 12日㈰
出張先：上越教育大学
用　務：「宗教と社会」学会第24回学術大会に出席。「キリスト教聖書の翻訳にみられる現地語語彙の選択とローカル社会の再編」に関する研究発表を行いコメントを得て議論を発展させる。
出張者：田崎郁子

日　時：2016年７月26日㈫～９月９日㈮
出張先：チェンマイ大学、パヤップ大学（公文書館、Thomas David Library）、タイ国カレン・バプテスト会議、ボケオ行政区、ロクサ聖書学校（タイ）、ビルマ・カレン・バプテスト会議、各地の教会と村（ミャンマー）
用　務：タイとミャンマーにフィールド調査及び文献収集に出かけ「キリスト教聖書の翻訳にみられる現地語語彙の選択とローカル社会の再編」に関する議論を発展させる。
出張者：田崎郁子

一般研究関本班
日　時：2016年９月８日㈭～９日㈮

出張先：実践女子大学図書館（黒川文庫）
用　務：『苔の衣』諸本調査（黒川春村書入本、黒川四冊本）
出張者：関本真乃

日　時：2016年９月15日㈭～ 16日㈮
出張先：もりおか記念文化館
用　務：『苔の衣』諸本調査（もりおか記念文化館蔵本）
出張者：関本真乃

一般研究宮崎班
日　時：2016年５月20日㈮
出張先：日本教育会館
用　務：第61回国際東方学者会議（主催　東方学会）に参加するため。特にシンポジウムI「スティラマティの虚像と実像」（座長　佐久間秀範）および同II「漢字文化圏に共通する漢字基盤の構築に向けて」（座長　下田正弘）に参加する。
出張者：宮崎展昌

日　時：2016年６月５日㈰
出張先：一般財団法人人文情報学研究所分室（東大赤門前、東京クリスタルビル8F）
用　務：科研基盤（S）「仏教学新知識基盤の構築―次世代人文学の先進的モデルの提示」（代表・下田正 弘）・科研基盤（B）「密教思想と他の仏教思想との関係性～ヴィクラマシーラ寺院の学僧の著作群を 中心に～」（代表・久間泰賢）の合同研究会２日目のĀmnāyamañjarī テクストマークアップ研究会への参加
出張者：宮崎展昌

日　時：2016年７月４日㈪
出張先：佐賀県立図書館
用　務：鍋島家文庫所蔵・佐賀県立図書館寄託の資料「普超三昧経」および「放鉢経」の閲覧および撮影のため
出張者：宮崎展昌

日　時：2016年８月２日㈫
出張先：東大寺総合文化センター
用　務：研究会・仏教の真理表現について　第１回特別研究会に参加
出張者：宮崎展昌

日　時：2016年９月２日㈮～４日㈰
出張先：東京大学
用　務：日本印度学仏教学会第62回学術大会に参加し、口頭発表を行う
出張者：宮崎展昌

一般研究堀田班
日　時：2016年８月９日㈫～ 13日㈯
出張先：東國大学校仏教学術院（韓国・ソウル）
用　務：古典インド倫理研究会への参加
出張者：堀田和義

日　時：2016年８月22日㈪～ 25日㈭
出張先：①小樽商科大学、②北海道武蔵女子短期大学
用　務：①インド古典写本研究会、②古典インドの死生観に関する研究会への参加
出張者：堀田和義

日　時：2016年９月２日㈮～４日㈰
出張先：東京大学
用　務：日本印度学仏教学会第67回学術大会への参加
出張者：堀田和義

一般研究高橋班
日　時：2016年７月25日㈪～ 27日㈬
出張先：パシフィコ横浜
用　務：ICP2016（International Congress of Psychology）での学会発表及び情報収集
出張者：高橋真

研　究　所　報　第69号
2017年３月１日　発行
編集発行　大谷大学真宗総合研究所
〒603-8143 京都市北区小山上総町
Tel. 075-411-8498　Fax. 075-411-8435
Email. kenkyusyo@sec.otani.ac.jp

©2017 Otani University Shin Buddhist Comprehensive Research Institute